

研究ノート

南フランス・ガール県北部のロマネスク聖堂（1）

ーボワ・デ・ランスからアレスとその周辺までー

中川久嗣

Les Églises Romanes dans le Nord du Département du Gard (1) : autour du Bois des Lens et d'Alès

NAKAGAWA Hisashi

Résumé

À la suite de la monographie précédente, je traite ici les églises, les chapelles, les abbayes et les prieurés de l'époque romane ou du style roman qui se trouvent au nord du département du Gard, surtout alentours du Bois des Lens et d'Alès. Ce pays correspond approximativement à l'ouest de l'ancien diocèse d'Uzès et d'Alès, et aujourd'hui à l'arrondissement d'Alès. Il s'agit la porte sud des Cévennes. Sur chacune de ces églises, j'analyse son histoire brève, sa forme, sa structure architecturale, ses sculptures, et ses décorations, etc.

本稿では南フランスのガール県北部（現在のアレス郡 *Arrondissement d'Alès*）に広がる丘陵地帯「ボワ・デ・ランス」（*Bois des Lens*）周辺からセヴェンヌの中心都市アレスとその北西側の地域に点在する中世のロマネスク聖堂を対象とし、可能な限り知りうるものすべてを訪問・調査し考察を加えた（アレスの東からガール県最北端のオート＝ヴァレー＝ドゥ＝ラ＝セーズにかけての地域については次号の予定）。

取り扱う聖堂は、ロマネスク期とは言っても厳密な時代の限定はせず、11・12 世紀のいわゆる盛期のロマネスク期を中心として、その前後の時代もゆるやかに含めたものである。聖堂全体がロマネスク期のものから、大なり小なりその時代の部分が残っているもの、建築様式がロマネスク様式をとどめているもの、そして現在では遺構となっているものなども含まれる。建築の一部分がロマネスク期のものとなると、その数は非常に多くなり、その全てを網羅することは難しい。結局はロマネスクの部分のどの程度残っているのかによるのであるが、その選択が多少とも恣意的なものにならざるを得ないことはあらかじめ断っておきたい。

聖堂の配列は、おおよそ現在の行政地域区分に準じて整理することとし、ガール県の県番号（30）、大まかな地域、そして自治体（*Commune*）の順で番号を付した（フランスの地方のコ

ミューンとはしばしば合併・再編が行われるので、最新ののものには対応していないこともあり得る)。同一のコミュニティに複数の聖堂がある場合は、「a. b. c. d.」というようにアルファベットで区分した。

訳語について。まず日本語にするのがなかなか難しい「バロン」(baron)は、本稿では差し当たって単に「領主」、あるいは一般にしばしば用いられる「男爵」を採用した。次に聖堂の名称については、本文中で建築物としてのそれを指す場合はそのまま「聖堂」とし、個別的名称としては「教会」あるいは「礼拝堂」を用いた。教区教会については、いちいち名称に「教区」を付けることはしていない。カテドラル(司教座聖堂)は「大聖堂」と記した。「abbatiale」は通常「修道院付属教会」「修道院付属聖堂」などの訳語をあてるが、本稿では「修道院教会」とした。また「prieuré」についても、わが国では「小修道院」と訳すことが多いが、本稿では個別の名称を記す場合以外はそのまま「プリウレ」と記してある。「chapelle」は、聖堂内にあるものは「礼拝室」とした。なお身廊内部のベイは、西側から第1ベイ、第2ベイという順に数える。

採りあげる聖堂は、そのほとんどが筆者が直接訪問・調査したものである。ただし私有地、アクセス困難その他の諸事情により訪問調査できなかったものには▲印を付した。それぞれの聖堂についての参考文献・資料などの参照情報は、各聖堂ごとに記したが(WebsiteはWSと略記)、全体を通してのビブリオグラフィは最後にまとめてある。写真画像は筆者の撮影による。誌面の都合ですべての聖堂の写真画像をここに掲載することはできない。それらは筆者開設のウェブページ(<http://nn-provence.com>)で閲覧可能である。

30.4.1 モンミラ／ノートル＝ダム＝ドゥ＝ジュフ教会

(Église Notre-Dame-de-Jouffe, Montmirat) 遺構▲

モンミラは、アレスから県道 D6110 を南へおよそ 28 キロ、ニームからは D999 で北西へおよそ 24 キロである。ノートル＝ダム＝ドゥ＝ジュフ教会の遺構は、村役場の北東およそ 1.8 キロの小丘の上にある。途中、ル・カステラスと呼ばれる中世の城塞があった場所を通って小丘を登る。この城は 11 世紀頃に、アンデューズ家の家臣でもあったモンミラの領主が築いたものであった。城とノートル＝ダム＝ドゥ＝ジュフ教会のあるこの小丘の歴史は、最も古くは青銅器時代後期にまでさかのぼる。またケルト時代からガロ＝ローマ時代にかけてのオッピドゥム(oppidum／要塞集落)も見つかっていて、ローマ時代の井戸や貯水槽の跡なども発掘されている。さらにこの小丘の北側のマブスケの山(crêtes de Mabousquet)には紀元前 1 世紀後半から紀元 1 世紀後半頃の聖域であった円形構築物の遺構もあり、そこからは祈願碑銘(ex-voto)が刻まれた小祭壇石も複数見つかっている。

ノートル＝ダム＝ドゥ＝ジュフ教会の遺構があるのは、ジュフ丘の標高 196 メートルの場所である。聖母に捧げられた最初の聖堂は、4 世紀にローマ時代のジュピター神殿の跡に建てられたとされる(それが「ジュフ(Jouffe)」という地名の由来であるともいう)。10 世紀頃にはローヌ下流域に進出してきたクリュニー修道会のサン＝サテュルナン＝デュ＝ポール小修道院

(*Prieuré de Saint-Saturnin-du-Port* [30.1.1]) の傘下に入っていた。現在遺構が残る聖堂の建物は、中世の間ここにあった修道院に付属するもので、その建設は 11 世紀から 12 世紀にかけてであると思われる。教区としてはユゼス司教区に属した。16 世紀の宗教戦争によって破壊された後に放棄された。

平面プランはラテン十字形であるが、東西方向の身廊・後陣部分よりも南北のトランセプトの長さの方が長かった。トランセプトの大部分は消滅しているが、北翼の西側壁面は、半円形の壁アーチが部分的に残っている。また 2 ベイからなる身廊部の南北の側壁に付けられた半円形の壁アーチとベイを区切る壁付き半円柱がやはり部分的に残されている。身廊の西側は 2 階建て構造になっていて、セグメンタル・アーチによって地下部分と上階部分が区切られている。

建物には古代のオッピドウムから取られた石材がいくつも埋め込まれている。西ファサードの壁面は、かなり崩れてはいるが、半円頭形のロマネスク様式の扉口と、その上にやはりロマネスク様式の窓が残されている。扉口の向かって右側には、初期キリスト教時代の石棺の断片が埋め込まれている。

Bibliographie :

Bessac, et al. (2007) pp.33-42; *CAG*, 30/3, pp.469-474; Clément (1993) pp.221-222; Germer-Durand (1868) p.108; Pomarèdes et al. (1991) pp.1-11; GV.

30.4.2 ムレザン／サント＝クロワ教会 (*Église Sainte-Croix, Moulézan*)

ムレザンはモンミラから県道 D123 を北へ 4 キロである。アレスからは南へ約 25 キロ、ニームからは北へ約 24 キロである。ニームとアレスの間を南北およそ 25 キロにわたって連なる広さ約 8000 ヘクタールの「ボワ・デ・ランス」(*bois des Lens*) と呼ばれる森が続く丘陵地帯の中ほどの西端に位置する。古くからユゼス司教区に属し、またこの地にあったブリウレは、サン＝ジル修道院の管理下に置かれていた。

サント＝クロワ教会 (12 世紀には« *Ecclesia Sancte-Crucis de Molasano* ») は、ムレザンの村のほぼ中央に建っている。古い部分としては、教会広場 (*Place de l'Église*) に面したロマネスク期の半円形後陣が残されている。ただしその古い聖堂から見るとトランセプトのように南北方向に新しい建物 (19 世紀) が増築されており、そのうち北側の建物が現在のサント＝クロワ教会の扉口となっている。また南側は新しい内陣部となっており、その外側は五角形である (この新しい後陣の向かって右側には聖具室とその出入口が作られている)。したがって古いロマネスク期の内陣 (後陣) は、現在のサント＝クロワ教会にあっては、あたかも身廊部の東側に付けられたトランセプト様の礼拝室となっている。ただしこのロマネスクの古い後陣は、聖堂の外側から見ると、歴史的な古さ、大きさ、高さなどの点で、新しい建物よりもはるかに強い存在感を放つものとなっており、新しい後陣の方がむしろ小さなトランセプトのように見えるのである。

この古い後陣は高さがあって、中ほど少し上の部分までは整形された中石材が比較的規則正しく積まれている。この部分は半円形の平面プランとなっているが、そこから上の部分は積み

石が小石材となり、しかも形は6つの面を持つ多角形である。18世紀初めのカミザール戦争の際に被害を受けているので、その後の修復の際に多角形にしてかさ上げされたものと思われる。後陣の中央には中ほどの高さから少し下のところに（すなわち古い壁面部分に）、隅切りされた半円頭形の細長い窓が開けられている。

聖堂内部は、新しい身廊の東側に古いロマネスク期の半円形の後陣が続く。太い円筒形コーニスが水平に巡り、その上に半ドームが架かる。中央に開けられた細長い窓は、外側と同じく内部に向けても隅切りされている。ただしその枠組みの白い石はその周囲の壁面の組石の色と異なっており、修復されたものであることが分かる。新しい後陣内部は五角形で、石積みもその色も、古い後陣のものとは全く異なる。



30.4.2 Moulézan

Bibliographie :

Clément (1993) p.193; Site officiel de la commune de Moulézan.

30.4.3 モンタニャック／サン＝マルタン教会 (Église Saint-Martin, Montagnac)

モンタニャックのコミューンは、ニームから県道 D907 で北西へ約 23 キロ、アレスからだ D6110 と D907 を南へ約 27 キロである。ムレザン [30.4.2] と同じく「ボワ・デ・ランス」と呼ばれる丘陵地帯の西側に位置する（ムレザンからは北へ約 3 キロ）。標高は約 180 メートルである。村から直線距離にしておよそ 2.5 キロ南の標高約 240 メートルの山の中には、1200 平方メートルの広さを持つ古代ローマ時代の石切り場の遺跡が残されている（Carrière romaine du Mathieu）。アウグストゥスの時代にあたる紀元前 1 世紀後半から紀元 1 世紀前半頃のものである。

さらに古い歴史的な遺物としては、モンタニャックのメゾン＝オーブで見つかった新石器時代後期（およそ紀元前 2500 年くらい）の、不思議な人物の姿を彫刻した浅浮き彫り石板（Statue-menhir de Maison Aube）が知られる。このような人物石板は、ラングドックのエロー県西部からオード県、そしてルエルグ地方などで数多く見つかるものであるが、モンタニャックのものは、目と鼻が「T」の形をした四角い顔を持ち、両手を胸に当てたポーズを取っている。

ロマネスクのサン＝マルタン教会は、モンタニャックの村のほぼ中心の、現在の村役場（mairie）のすぐ北に建っている。2 ベイからなる身廊の東側に半円形の後陣が続く。身廊の外壁には、2 つのベイの間と、西壁の両側に扶壁が付けられている。身廊北側は石積みだけの素っ気のない外壁であるが、南側においては、2 つのベイのそれぞれ中ほどの高さの所に、半円頭形のロマネスク様式の窓が開けられている。そのうち東側のベイの窓の枠部分の向かって左側に、柱身は失われているが、古い柱頭彫刻だけが残されている。カロリング期の記憶を感

じさせる3条線からなる組紐文様(円環と4つの角の組み合わせ)である。また柱頭の下部は、ひねり紐文様のアストラガル(玉縁)となっている。このような組紐文様は、同じガール県ではベルニス(Bernis [30.3.2])のものがよく知られる。

聖堂の扉口は身廊南壁の西側のベイに開けられている。その頭部は二重のセグメンタル・アーチとなっているが、外側のそれは少しいびつな形をしている。この扉口には彫刻装飾の類いは見られない。身廊西壁には上部に丸窓が開けられ、その上には19世紀のものと思われる小さな鐘楼が立っている。



30.4.3 Montagnac

半円形の後陣は、上塗りされた漆喰が部分的に剥落して、建設当時の石積みが露出している。中石材の端正な切石である。一番下の土台部分にも、それよりはラフな形で残された石積みを見ることができる。後陣の向かって左側には近年になって作られた塔のような構造物が付き、また向かって右側には、後陣の屋根と同じ高さまで立ち上がる方形で量塊感のある建物が付けられている。北側の壁には小さな開口部が見られる。この建物は内陣の北側に作られた聖具室である。後陣中央には隅切りされた大きめの半円頭形の窓が開けられている。

聖堂内部は最近になって地元保存会による修復が進められているが、古い石積みが壁面に比較的良く残されている。身廊の2つのベイを分ける太い壁付きの半円柱は、先に触れた「ボワ・デ・ランス」の石切り場から切り出された明るい色の石灰岩で、ヴォールトに架けられた半円形の横断アーチを受け止めている。後陣は水平に延びるコーニスの上に半ドームが架かる。内陣北側には聖具室への出入口が開けられている。

Bibliographie :

Bessac (1996) pp.10-34, pp.113-150; CAG, 30/3, p.462; Clément (1993) p.193; Durand (1977) pp.20-23; Germer-Durand (1868) pp.138-139; Goiffon (1881) pp.176-177.

30.4.4 モンティニャルグ／旧サン＝ミシェル教会

(Ancienne église Saint-Michel, Montignargues)

モンティニャルグは、ニームからは県道 D907 と D221 を通って北西に向かい約 20 キロ、アレスからだと国道 N106 と県道 D7 を通って南へ約 28 キロである。丘陵地帯「ボワ・デ・ランス」をはさんでモンタニャック [30.4.3] のおおよそ反対側にあたり、直線距離にするとモンタニャックから東へ約 6 キロである。

現在の村の規模は決して大きくはないが、その歴史は古く、村の周辺では鉄器時代の遺構や、

古代ローマ時代の住居跡、陶器類、貨幣 (« Col. Nem » と刻印) などが見つかった。

旧サン=ミシェル教会は、村を見下ろす標高約 140 メートルの場所に建っている。中世における聖堂の名前は « ecclesia de Montinanicis » または « ecclesia Sancti-Michaelis de Montinchanicis » で、ユゼス司教区に属し、この地にあったブリウレ (サン=ミシェル小修道院) の附属聖堂であった。15 世紀にはここから東へ約 4 キロのラ・ルヴィエール (La Rouvière) のブリウレと共に、ニーム大聖堂参事会の管理下に置かれていた。宗教戦争の時に被害を受けている。大革命の後、国有財産として売却され、所有者も入れ替わった。現在は完全に個人所有の住居として使用されている。



30.4.4 Montignargues

旧サン=ミシェル教会は、東西 13 メートル、南北 7.5 メートルの小さな聖堂である。身廊には東端の後陣との境に扶壁が付けられているが、身廊部分のものは取り払われている。ただしかつての扶壁の痕跡が身廊の南北壁面に 2 つずつ残されている。一見したところベイの数は 2 つであるが、特に西側の扶壁の跡の位置から察するに、かつてのサン=ミシェルは西側にさらにもう 1 つベイがあって全部で 3 ベイからなる身廊であったのではないかと推測することもできる。実際、現在の西ファサードの土台部分に、さらに西側に続く石積みが残されている。19 世紀の所有者が、身廊を切り詰めて西ファサードを作り直したものと思われる。また西ファサードのみならず、身廊南側にもかつてはなかった生活のための出入口や窓がいくつも開けられ、さらに身廊北側には大きな煙突が作られるなど、住居用の改造が (残念ながら) 数多く施されている。

旧サン=ミシェル教会は、東西 13 メートル、南北 7.5 メートルの小さな聖堂である。身廊には東端の後陣との境に扶壁が付けられているが、身廊部分のものは取り払われている。ただしかつての扶壁の痕跡が身廊の南北壁面に 2 つずつ残されている。一見したところベイの数は 2 つであるが、特に西側の扶壁の跡の位置から察するに、かつてのサン=ミシェルは西側にさらにもう 1 つベイがあって全部で 3 ベイからなる身廊であったのではないかと推測することもできる。実際、現在の西ファサードの土台部分に、さらに西側に続く石積みが残されている。19 世紀の所有者が、身廊を切り詰めて西ファサードを作り直したものと思われる。また西ファサードのみならず、身廊南側にもかつてはなかった生活のための出入口や窓がいくつも開けられ、さらに身廊北側には大きな煙突が作られるなど、住居用の改造が (残念ながら) 数多く施されている。

半円形の後陣は身廊の屋根と同じ高さまで立ち上がる。中ほどの高さの所までは大きさも形も不規則な石積みであるが、途中から上は整形された中石材がきっちりと並べられた石積みとなる。このような規則的な石積みと不規則な石積みの混在は、身廊の南北の壁面にも見ることができる。後陣の上部には、半円形小アーチが連続するいわゆるロンバルディア帯が巡る (その一部は失われている)。小アーチを受け止めるモディオンは 6 つ残されており、そのうち 4 つは幾何学的文様で、残りの 2 つは人面である。この人面は、向かって右側のものは穏やかに微笑んでいるように見え、左側のものは目を見開き髪を逆立てて怒りを表しているように見える。

聖堂は個人所有で実際に住民がそこに居住している。内部は完全に住居用に改装されてしまっており、聖堂建築を感じさせるものはなににもない。

Bibliographie :

CAG, 30/3, pp.468-469; Clément (1993) pp.286-288; Germer-Durand (1868) pp.141-142; Goiffon (1881) pp.183-184; RIP.

30.4.5 サン=ジュニエス=ドゥ=マルゴワール=レス／サン=ジュニエス教会

(Église Saint-Geniès, Saint-Geniès-de-Malgoirès)

サン=ジュニエス=ドゥ=マルゴワール=レスは、ニームから県道 D926 と国道 N106 で北へ約 21 キロ、アレスからは N106 で南へおよそ 27 キロである。ニームとアレスの間の少しニーム寄りのところに位置する。旧市街の周囲に広がる新興住宅地も含めると、人口約 3400 の小都市である。昔からしばしば、ガルドン川の支流で街の中を東西に流れるエスキエル川 (l'Esquielle) や街の北を流れるオリオル川 (l'Auriol) の氾濫に見舞われてきた。中世以来オーヴェルニュとラングドックを結ぶレゴルダヌの道 (chemin de Régordane) や塩の輸送ルートの近くにあつて、商業の中継地点として重要な役割を果たしてきた。農業のほか毛織物業でも栄えたが、七月王政で最後の首相となった政治家で歴史家でもあったフランソワ・ギゾー (François Guizot, 1787-1874) は、この街のブルジョワジーであつたギゾー家の家系に属する。彼の父アンドレ・ギゾーはジロンド派であつたため、モンターニュ派による恐怖政治の際に逮捕され、1794 年 4 月にニームにおいてギロチン刑に処せられている。また彼の従兄弟で 1790 年にサン=ジュニエスにおいてフランスで初めての黒人の自治体首長 (maire) に選ばれたルイ・ギゾー (母親がアフリカ系カリブ人であつた) もまた、同年 7 月に同じ理由でニームにおいてギロチン刑となっている。

中世における世俗領主としては、アンデューズ家の家臣であるモンブザ (Montpezat) のバロンがサン=ジルと共にこの街に支配権を及ぼしていた。アンデューズ家の封建宗主はトゥールーズ伯であり、13 世紀前半のアルビジョワ十字軍の後にはサン=ジュニエスも王領に編入されるが、15 世紀以降はジョワイユーズ副伯 (vicomte de Joyeuse) やユゼスのクリュッソル家 (les Crussol d'Uzès) などが領主として入れ替わる。1565 年にクリュッソル家が国王シャルル 9 世によってユゼス公家に引き上げられると、サン=ジュニエスの街もフランス革命まではユゼス公領所属都市となる。実際の街の行政はコンシュラによって担われた。

街は大革命まではユゼス司教区に属し、この地にあつたブリウレは、12 世紀にはサン=ジル修道院の管理下に置かれていた。宗教改革期になると、とりわけ 1567 年のニームにおける「ミシュラード事件」(聖ミカエルの祝日にカトリックがプロテスタントに襲撃され殺害された) の後は、サン=ジュニエスもプロテスタント (ユグノー) の重要な拠点の 1 つとなった。そのためナントの勅令 (1598 年) によって宗教戦争がとりあえず終結した後になつても反乱を続けるプロテスタントとカトリックによる争奪的となり、繰り返される戦乱によって街と共にサン=ジュニエス教会も大きな被害を受けた。1704 年には今度はカミザールによって街が包囲され、カトリックの守備隊は全滅し、サン=ジュニエス教会も再び焼かれた。街を取り囲む城壁もこの時に破壊されたという。

サン=ジュニエスのブリウレの名が史料に現れるのは、それをサン=ジル修道院の所有として認める教皇カリストゥス 2 世の 1119 年の教書においてである (同様の言及は 1156 年の史料にも見られる)。先に触れたように 16 世紀以降は宗教戦争やカミザール戦争によって被害を受け、そのたびに修復・再建が重ねられてきた。大革命の後には一時的に「理性の神殿」とされた。19 世紀後半から外部の壁面やヴォールトなどの大々的な修復工事が行われた。その際には、内

部のフレスコ画やステンドグラスなどが新しくされている。また内陣北側に聖具室が建てられ、鐘塔に吊す鐘も新たに作られた。なお 19 世紀からは、カトリックとプロテスタントの両者がこの聖堂を共同で使用している。

聖堂の壁面は、おおよそ下半分において、最初に建設された 12 世紀ロマネスク期のもと思われる石積みが残されていて、とりわけ東端の後陣および身廊南側の外壁のそれぞれ下部の漆喰が剥がれたところにそれを見て取ることができる。聖堂の平面プランはラテン十字形である。19 世紀の西ファサードはネオ=ロマネスクで、扉口は半円形のアーキヴォルトを左右に立つ 2 本の円柱が支える。その上には 2 つ一組の半円頭形の窓が開けられている。このファサードの下 3 分の 1 は中石材の石積みで、上 3 分の 1 は色の異なる石灰岩と砂岩による小石材が組み合わせられて積まれている。西ファサードの向かって右側にはすらりとした鐘塔が立ち上がる。身廊部の外側は扶壁とその間に開けられた窓が目につくが、北側はさまざまな建物が作られていて雑然としている。



30.4.5 Saint-Geniès-de-Malgoirès

の向かって右側にはすらりとした鐘塔が立ち上がる。身廊部の外側は扶壁とその間に開けられた窓が目につくが、北側はさまざまな建物が作られていて雑然としている。

聖堂内部は 19 世紀における壁面やヴォールトの修復と 20 世紀になって描かれた新しい壁画によってきれいに整えられている。身廊は 4 つのベイに分かれ、西端の第 1 ベイにはトリビューン（2 階席）が作られている。第 3 ベイの南北はトランセプトを形作る礼拝室である。第 1 ベイ以外は南北の礼拝室と内陣も含めて、天井はすべてリブのない交差ヴォールトとなっている（ただしリブは絵で描かれている）。ベイを分ける横断アーチは半円形で、コーベルが受け止める。その下のピラストル（壁付きの方形柱）は、凱旋アーチを除いてすべて絵で描かれたものである。後陣は水平のコーニスの上に半ドームが架かる。この後陣内部は新しい壁画が描かれているため、外部と異なって古さはまったく感じられない。半ドームにはキリストと彼を中心にして座る 4 人の福音書記者の姿が描かれている。

Bibliographie :

Clément (1993) p.193; Germer-Durand (1868) p.207; Goiffon (1874) pp.5-12; Goiffon (1881) pp.285-287; GV.

WS: « Site de l'Inventaire général du patrimoine d'Occitanie »; « Site officiel de la commune de Saint-Geniès-de-Malgoirès ».

30.4.6 ドメサルグ／サン=テティエンヌ教会 (Église Saint-Étienne, Domessargues)

アレスから国道 N106 で南に約 25 キロである。丘陵地帯「ボワ・デ・ランス」の北部西側にあたる。ドメサルグのコミューンは、中ほどにある村役場をはさんで西側に 20 世紀後半から新興住宅地が広がり、古くからの集落は村役場の東側の小高い丘の上にある。サン=テティエンヌ教会はこの旧集落の北端に建っている。この村の周囲からは古代の墓や住居跡らしき遺構と

ともにアンフォラや陶器類、貨幣などが見つかった。またサン＝テティエンヌ教会も、現在の建物より前の古いカロリング期の聖堂が、さらにそれ以前の古代の異教の神殿の跡に建てられたものであるとされる。ドメサルグは中世の間はユゼス司教区に属した。15 世紀初め頃にはソゼ (Sauzet) およびサン＝シャプト (Saint-Chaptes) の領主の支配下にあった。16 世紀の宗教改革期には村の住民のほとんどがプロテスタントとなっていた。18 世紀初めのカミザール戦争の際には反乱側を援助し、この村出身のマルタンと言う名のカミザールが、1704 年 10 月にニームで絞首刑になっている。なお、ニームの南西約 19 キロのヴェルジェーズ (Vergèze) を水源とするミネラルウォーターから、世界的にも有名な炭酸水「ペリエ」を生み出したルイ・ウジェーヌ・ペリエ博士 (Louis-Eugène Perrier) は、ここドメサルグの生まれである。

現在のサン＝テティエンヌ教会は、建設されたのは 12 世紀後半頃と思われるが、史料にその名が初めて現れるのは 1235 年のことである (Sanctus-Stephanus de Domensanicis)。百年戦争や宗教戦争、そしてカミザール戦争などによって幾度も破損するが、そのたびに修復工事が行われてきた。聖堂のすぐ北側に隣接していた村の墓地は 1940 年に撤去・移転している。聖堂は東西 15 メートル、南北幅 9 メートルで、11 メートルある身廊の高さが目を引く。整形された中石材のきっちりとした石積みで西ファサードと身廊、そして後陣に残されている。外壁には扶壁が身廊南北の外壁にそれぞれ 3 つずつ付けられている。東端のものは後陣の高さに合わせて低くなっている。身廊は 2 ベイで後陣は半円形という、ガール県の北部から東部においてしばしば見られるシンプルな形である。

西ファサードに開く扉口は方形であるが、その上に半円形のアーキヴォルトが架かる。タンパンその他に彫刻装飾の類いは見られない。扉口の上にはペディメントの中央にロマネスク様式の窓が 1 つ開けられている。外側に向けて隅切りされており、頭部のクラヴォー以外は摩耗している。ペディメントの頂部には小さな鐘楼 (19 世紀) が載せられている。身廊南側にはやはり隅切りされた半円頭形の窓が各ベイに 1 つずつ開けられているが、それらの高さの位置が異なっている。高い位置にある西側のベイのものの方が時代的には古い。東側のベイの下には、かつてここにあったと思われるブリウレとの行き来のために開けられていた半円頭形の出入口の痕跡が残されているが、現在は埋められている。半円形の後陣は、古い石積みで最もよく残されている。高さは身廊部よりも低い (約 8 メートル)。中央には半円頭形の窓が開けられているが、これは 19 世紀に修復されたものである。後陣の上の身廊東壁にはかつては窓が開けられていて、宗教戦争期にはその内部に台床が作られ、そこから遠くまで見張れるようになっていたが、現在はその窓は外側では完全になくなっている (内部にはその痕跡が残されている)。

聖堂内部は日頃使用されていないからか、多少とも荒れた感じが否めない。2 ベイから



30.4.6 Domessargues

なる身廊の天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトである。東端の半円形の後陣の上には水平のコーニスをして半ドームが架かる。後陣の窓は外側は半円頭形であるが、内部は馬蹄形の枠組みの中に開いている。

Bibliographie :

CAG, 30/3, pp.355-356; Clément (1993) pp.399-400; Germer-Durand (1868) p.74; Goiffon (1881) pp.113-114; Gueidan (1982) pp.13-33, pp.69-72; GV.

WS : « Le Herisson de Domessargues / L'histoire du village de Domessargues »

30.4.7 ブリニョン／旧サン＝ポール城塞礼拝堂

(Ancienne chapelle castrale Saint-Paul, Brignon)

ブリニョンは、ニームへは国道 N106 で南へ約 25 キロ、アレスへはやはり N106 で北へ約 23 キロで、この 2 つの都市のほぼ中間にあたる。N106 を 4 番の出口で降り、県道 D936 を 1.2 キロ南に進んで D7 に入る。そのまま北に向かいガルドン川を渡るとすぐにブリニョンである。

ローマ時代以前はケルト系リグリア人のオッピドゥム (Briga) があつた。村のすぐ北の標高 129 メートルの丘の上で発掘が進められたセル・ドゥ・ブリエンヌ (Serre de Brienne) と呼ばれる地区がそうで、ローマ以前のマッサリア (マルセイユ) やアレラテ (アルル) との交易を示す陶器類などの遺物も見つかっている。このオッピドゥムは、ガロ＝ローマ時代にはネマウス (ニーム) を首都としていたヴォルク・アレコミク (ウォルカエ・アレコミキ) 族と同盟関係にあり、紀元 1 世紀には列柱、壁画、床モザイクなどを備えた規模の大きな邸宅があつた。しかしこの地区は、早くも 2 世紀には放棄されたようである。

その後、中世も 11 世紀頃になると古代のオッピドゥムのすぐ南に、この地を支配していた封建領主の城が建てられ、さらに 12 世紀に入ると集落をその中を含む形で城壁が建設された。この城壁は全体として四角い平面プランを持ち、一定間隔で円塔や角塔が並ぶもので (そのいくつかは現存する)、それはまさしく小規模な城塞都市とでも言うものであつた。その時代、ブリノ (Brinno) と呼ばれたこの城塞都市は、トゥールーズ伯家に従属するニーム副伯領の中にあつて、現地領主はレーモン (Raimond) 家であつた。レーモン家は 12 世紀にニームにおいて創設されたアレンヌ騎士団 (chevaliers des Arènes [30.3.1a]) の一員としてそこで繰り広げられた政争にも加わっていた。13 世紀にはかなり増加した住民の数も、次の世紀には百年戦争などの打ち続く争乱や疫病 (ペスト) などによって激減した。百年戦争において有名なボワティエの戦い (1356 年 9 月 19 日) にはブリニョンの領主クロード・レーモンもフランス国王の側として参戦し、フランス側の大敗にもかかわらず生還している。14・15 世紀のブリニョンは、南フランスの他の諸都市と同じように、領主とともに複数の執政が行政を担当する執政府都市 (コンシュラ都市) となっていた。16 世紀以降は、これもまたセヴェンヌの他の多くの街や村と同様に、宗教戦争やカミザール戦争などの荒波に翻弄されることになる。領主としてのレーモン家は 18 世紀までで終わり、19 世紀にはブリニョンの城は、アデマール＝サン＝モー

リス（Adhémar-Saint-Maurice）家の所有する居館となった。

ブリニョンの旧サン＝ポール城塞礼拝堂は、中世の周壁の北東端に位置し、現在の村役場のすぐ東に隣接する形で建っている。印象的なのは身廊・後陣の南北幅の狭さに対するその高さである。縦にスリムな細長さとでも言えばよいであろうか。建設は12世紀前半頃で、城と集落が周壁で囲まれたのと同時期のことである。城の方形のドンジョンに隣接して建てられた城塞礼拝堂（chapelle castrale）であった。その後、14世紀後半から15世紀前半の百年戦争期に要塞



30.4.7 Brignon

化され、後陣の高さが加えられた。1703年にはカミザール戦争によって焼かれている。大革命の際には国有財産として売却されたが、後にブリニョンのコミューンの所有となった。

身廊の外壁全体および後陣の下半分は整形された中石材（石灰岩）がきっちりと積まれている。後陣の水平のコーニスから上半分は、要塞化の際に増築された部分で、不整形の平たい石がラフに積まれている。後陣下部中央には、かつて開けられていたロマネスク様式の窓の半円形の頭部のモノリスが残されている。その下には21世紀に入って大きな方形の窓が開けられた。後陣の上半分にも方形の窓（20世紀）が2つ、縦に並べて開けられている。この後陣上部には、要塞化された際に付けられた縦に細長い銃眼の痕跡が3ヶ所残されている。

身廊外壁においては、屋根との境の持ち送りのすぐ下に、ロマネスク期の装飾帯のブロック石が並べられている。そのブロック石の上半分は歯車形、下半分はダイヤ形（菱形）装飾が連続した文様となっている。同様のブロックの1つが後陣上部（南側）にも埋め込まれているのが見える。この身廊南壁には出入口が2ヶ所、その上に方形の窓が合わせて4つ開けられている。なおこの聖堂の北側の下半分と西側全面には別の建物が直接建てられている。特に西壁はまったく見ることができない。

聖堂内部は、19世紀には学校として使われ、20世紀になると後陣部分に貯水槽が作られていたというが、現在は身廊・後陣ともにきれいに改装されて1階部分にブリニョンのコミューンの図書館が入っている（2階部分は物置）。石積みが残されている1階部分の天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトである。天井以外の側壁は漆喰が塗られ、図書館の書架が並べられている。身廊部分はかつては2ペイからなっていたと思われるが、現在はペイを区切る横断アーチやそれを受けるピラストルなどはない。凱旋アーチの東側は小さな半円形の後陣で、その中ほどに大きな方形の窓が開けられている。その上にはかつて開けられていたロマネスク様式の窓の名残が見られる（ただし埋められている）。身廊の西端にもロマネスク様式の窓が見られるが、それも今は埋められている。

ブリニョンには、旧周壁の南側部分に残されている時計塔（Tour de l'Horloge）のすぐ東隣に、サン＝ポールの名を冠するもう1つ別の聖堂（Église Saint-Paul de Brignon）がある。こ

の建物は、もともとは中世ブリニョンの領主レーモン家が穀物倉庫(*grange/grenier à grain*)として使用していたものであったが、後に聖堂に作り変えられた。現在の建物は 19 世紀になってからのものである。建物の南東端は周壁の円塔となっている。壁面は周壁の塔と同じように、大きさの異なる石がラフに積まれたもので、身廊南側には半円頭形の窓が 4 つ並ぶ。東ファサードに扉口が開く。扉の左右には高い基壇の上に小円柱と方形の側柱が立ち、二重のアーキヴォルトを受け止めている。扉口の上にはニッチを介してさらに丸窓（正確には丸い外枠の中に四角い窓）が開く。ファサードの頂部には 19 世紀の鐘楼が載せられている。現在、上で見た旧城塞礼拝堂が図書館となっているので、ミサなどの祭式はこちらのサン=ポール教会で執り行われているようである。

Bibliographie :

CAG, 30/3, pp.266-272; Clément (1993) p.399; Germer-Durand (1868) p.36; Goiffon (1881) p.63; Goiffon (1916) pp.337-342; Moreau (1997) p.55; RIP.

WS: « Site officiel de la commune de Brignon »

Je transmets mes remerciements à Monsieur Rémy Bouet, le maire de Brignon, et à Madame Christiane Billaz, la présidente de l'association Brignon Patrimoine. Ils m'ont donné des renseignements très utiles sur l'églises Saint-Paul de Brignon.

30.4.8a ガリーグ=サント=ウラリー／サン=ミシェル教会

(Église Saint-Michel, Garrigues-Sainte-Eulalie)

ガリーグ=サント=ウラリー（あるいはガリーグ=サントウラリー）は、ブリニョンから県道 D982 で東へおよそ 10 キロである。1814 年にガリーグの村とサント=ウラリーの村が合併して今の形になった。ガリーグの旧集落は D982 の北側にあり、その北東端にサン=ミシェル教会が建っている。宗教戦争で被害を受けたが、1703 年 3 月にはカミザールの襲撃を受け、サン=ミシェル教会は再び司祭館とともに焼かれ、カトリック教徒が殺されている。大革命まではユゼス司教区に属した。またこの地はユゼス公の領有地でもあり、やはり革命まではユゼス公の城が廃墟となって残っていたというが、今は跡形もない。

サン=ミシェル教会はかつての古い墓地に隣接している。身廊部分は外壁にある扶壁および内部のピラストルによって 2 つのベイに分かれ、その東に半円形の後陣が続く。西ファサードは左右に付けられた扶壁の存在によって横に長く見える。方形の扉口と、その上に半円頭形のニッチ、さらに半円頭形の枠組みの中に縦長の方形の窓が開き、一番上には 19 世紀の大きな鐘楼が載せられている。聖堂内部は、身廊から後陣まで水平のコーニスが巡り、半円形の後陣の上には半ドームが架かる。後陣中央には隅切りされたロマネスク様式の窓が開けられている。

Bibliographie :

Germer-Durand (1868) p.97; Goiffon (1881) pp.132-133.

30.4.8b ガリーグ=サント=ウラリー／サント=ウラリー教会

(Église Saint-Eulalie, Garrigues-Sainte-Eulalie)

ガリーグ=サント=ウラリー (あるいはガリーグ=サントウラリー) のうち、サント=ウラリー地区はコミュニオンを横切る県道 D982 をはさんでガリーグ地区の南西に位置する。サント=ウラリー教会は、この地区のほぼ中ほどにあつて、ここを横切る県道 D322 沿い (北側) に建っている。身廊の南西端に非常に高さのある封建時代の円塔が付属する。この円塔の上には小さな鐘楼が載せられている。聖堂の壁面は不整形の中・小石材がラフに積まれているが、半円形の後陣は、整形された中石材の端正な石積みが部分的に残されている。この後陣には、北側の身廊との境目近くに細長い開口部が見られる。反対側の西ファサードには上部の切妻の所に半円頭形の窓が開けられている。身廊の南側には大きな扉口が開けられている。身廊北側には太い扶壁が3つ並べて付けられている。しかし開口部はまったく見られない。

サント=ウラリー教会は、大革命まではユゼス司教区内にあり、ブルデュック (Bourduc) の教区に属していた。宗教戦争の混乱の後、1703 年 1 月にはカヴァリエが率いるカミザールの襲撃を受けて焼かれている。その後、修復・再建が進められた。

Bibliographie :

Germer-Durand (1868) pp.202-203; Goiffon (1881) pp.275-276.

30.4.9a ブコワラン=エ=ノジエール／ノートル=ダム=ドゥ=ラ=ナティヴィテ教会

(Église Notre-Dame-de-la-Nativité, Boucoiran-et-Nozières)

丘陵地帯「ボワ・デ・ランス」の最も北にあるコミュニオンで、1813 年にブコワラン地区とノジエール地区の合併により、現在のブコワラン=エ=ノジエールのコミュニオンとなった。その中心であるブコワラン地区までは、アレスから国道 N106 で約 20 キロである。ここは古くからオーヴェルニュとラングドックの地中海地方を結ぶレゴルダヌの道 (Chemin de Régordane) に沿っていたが、ル・グラン・ランの山 (le Grand Ranc) とガルドン川の間にあつて、国道 N106、県道 D936、そしてニームとアレスを結ぶ鉄道セヴェンヌ線などが集まって通る場所であり、現在でも交通の要所である。ブコワラン=エ=ノジエールのコミュニオン域の北端にあるセヴェンヌ線の旧ネルス (ネール) 駅 (Gare de Ners) は、1841 年に完成した駅舎で、フランスでも最も早く作られたものの1つとして歴史的建造物に指定されている。このセヴェンヌ線は、オーヴェルニュ・アリエ県のサン=ジェルマン=デ=フォッセ (Saint-Germain-des-Fossés) とニーム (Nîmes-Courbessac) を結んで 1841 年から運行が開始された鉄道で、アレスを中心としたセヴェンヌの炭鉱産業発展に寄与した。旧ネルス駅はネオ・ゴシック様式で建てられたイギリスの駅舎を模したもので、1973 年まで使われていた。

ブコワランの西およそ 800 メートルのグラン・ランの山には標高 150 メートルのところに先史時代のオッピドゥムがあつた。新石器時代からローマによる征服までのもので、石積み、住居の痕跡、陶器類の破片、マッサリア (マルセイユ) 系のアンフォラの破片などが見つっている。またローマ時代のウィラの遺構がブコワラン周辺、特にその北側のラヴァル地区などで

発掘されている。

ブコワラン=エ=ノジュールのうちブコワランの名は、1027 年の史料であるニーム大聖堂のカルチュレールが初出である (Bocoiranum)。E. Goiffon によると、11 世紀にブコワランにあったプリウレは、オーヴェルニュのラ・シェーズ・デュー修道院の所有であったという。1210 年にはここはカストゥルム (Castrum de Bocoirano) としてその名が知られていた。宗教戦争期になると、住民はカトリックに対してほぼ倍近くのプロテスタントがいたという。大革命まではユゼス司教区に属した。

ブコワランの旧街区の北側の、今では鉄道 (セヴェンヌ線) が通るトンネルの真上にあたるところに、この村のシンボルとでも言うべき高さ 38 メートルの方形の塔が立ち上がる (内部は 8 階建て)。この塔は、東西約 75 メートル、南北幅約 10 メートルという細長い封建時代の城 (Château de Boucoiran) の西端に付けられた主塔 (ドンジョン) であった。城は 12 世紀以来、アレスの領主であるプレ家 [30.4.12a] が所有していたが、1310 年に国王フィリップ 4 世 (ル・ベル) の法務顧問官であったギヨーム・ドゥ・ブレジアンに売却された。1386 年 (または 1381 年) にはラングドック総督であったベリー公麾下のルイ・グリマルディが手に入れるが、その後は百年戦争のための増税に反対するテュシャン (tuchin) の反乱軍に奪われたりしている。18 世紀には城はカミザールの攻撃に抵抗したものの、ノートル=ダム教会に火が放たれるなどの被害を受けている (1703 年)。1947 年、24 歳の若き企業家ジャコモ・コロンビ (Giacomo Colombi) が妻とたまたまブコワランを訪れた際にこの城塔を気に入って城を買収した。コロンビ家は塔を修復し、その後は城とともに狩猟用の鉛ペレット工場に改造した。

ブコワランの旧街区の東側に残っている中世の城門 (porte de France) から西に向けて狭い街路を登ってゆくと、旧街区の西端にあるノートル=ダム=ドゥ=ラ=ナティヴィティ教会 (降誕の聖母教会) に至る。城の塔からは西へ 50 メートルの位置にあたる。建物は、通常とは異なり南北方向を向いている。それはこの聖堂が、かつて集落を囲んでいた周壁の一部として建設された城塞教会であったという事情による。身廊西側および後陣の西側の外壁の土台部分は、露出した岩場の上であって、その一部分が崩れており不安定である。周壁の一部をなしていた西側壁面は、大きさや形の異なる積み石が、比較的ラフに並べられているが、部分的に整形された積み石の列がきれいに残っている。身廊東側

はそれに比べると全体的に荒積みとなっている。この身廊は東側の壁面にだけ扶壁が 3 つ付けられていて、半円頭形の窓が、身廊部東側の壁には 2 ヶ所、西側の壁には 3 ヶ所開けられている。それらの窓はすべて修復されたものであるが、東側の窓の方が、より古いもののように見える。ただし、西側の向かって左端の窓およびその周囲の壁面は 20 世紀になって修復されたもののようで、その窓の上には「FERNANDEZ 1955」と刻まれた石がめ



30.4.9a Boucoiran-et-Nozières

込まれている。

身廊部第 1 ベイの東側には 18 世紀に作り替えられた方形の扉口が開く。そのリンテルには 1788 年という年号が刻まれた要石がはめ込まれている。この聖堂が 1704 年にカミザール戦争の際に焼かれた後に修復された年を示している。この身廊東側の第 2 ベイから北側には、礼拝室や聖具室などの建物が増築されている。西ファサードは不整形の石材の荒積みで、向かって左側（西側）には、かつて周壁の塔であった方形の建物が直接付属し、その上には 1855 年に小さな鐘楼が載せられた。西ファサード中央上部には丸窓が開けられている。

聖堂北端の後陣は五角形である。そのうち西面のみに半円頭形の隅切りされた窓が開けられている。後陣の北面（正面）の壁には開口部などはまったくない。東面は聖具室が増築されていてその壁面は最上部を除いて見ることはできない。

ブコワランの北およそ 1.5 キロのところには、鉄道のすぐ西側にレグリーズ (L'Église) と呼ばれる場所がある。そこには 11 世紀頃までプリウレ (Prieuré de Notre-Dame-des-Ombres) と小さな付属聖堂があったとされる。現在は農家となっており聖堂は消滅している。地名だけがその名残である。

Bibliographie :

CAG, 30/3, pp.251-253; Germer-Durand (1868) p.31, p.156; Goiffon (1881) pp.57-58, pp.210-211; Goiffon (1916) pp.258-261; Moreau (1997) pp.51-52.

WS : « Site officiel de la commune de Boucoiran-et-Nozières »

30.4.9b ブコワラン=エ=ノジエール／旧ノジエール教会

(Ancienne église de Nozières, Boucoiran-et-Nozières)

ブコワラン=エ=ノジエールのコミューンのうち、南に位置するノジエール (Nozières) の集落にも、かつてこの地にあったプリウレ (Prieuré Saint-Jean de Nozières) に付属していた古いノジエール教会の建物が残されている。プリウレ自体は消滅しているが、E. Goiffon によれば、聖堂の方は、大革命の後に国有財産として売却され、その後は民家の倉庫として利用されたという。ノジエールの集落を横切って西のソーヴ (Sauve) 方面に向かう県道 D8 沿い（県道 D936 から西へ 1.2 キロの地点、D8 の北側）にある。建物は現在でも古い聖堂らしき特徴を残している。その西壁には、ペディメントの中央に半円頭形のロマネスク様式と思われる窓が開き、南壁にはそこに付けられていた扶壁の名残のような痕跡も見られる。また建物の東側には半円形の後陣が見られる。現在もこの建物は個人所有の住居兼倉庫であり、新しい建物が増築されたり、後から出入口や窓などがいくつも開けられたりしている。私有なので内部にはアクセスできない。

Bibliographie :

Germer-Durand (1868) p.156; Goiffon (1881) pp.210-211; Goiffon (1916) p.261.

WS : « Site officiel de la commune de Boucoiran-et-Nozières »

30.4.10 カサニョル／サン＝マルタン教会 (Église Saint-Martin, Cassagnoles)

アレスから南へ国道 N106 を経由して約 15 キロ、県道 D6110 を経由すると約 17 キロである。ガルドン＝ダレス川 (le Gardon d'Alès) とガルドン＝ダンドューズ川 (le Gardon d'Anduze) が合流する川の湾曲部の内側 (西側) に、マサヌからラ・グランド・カバンヌまで東西 2.5 キロの長さで延びる小丘帯があり、その小丘の南側の斜面にカサニョルの旧集落が広がっている。

13 世紀前半、カサニョルとその城はアンデューズとソーヴの領主ベルモン (アレスの共同領主でもあった Pierre-Bermond d'Anduze とと思われる) が所有していた。15 世紀になってからもカサニョルの領主は引き続きアレス伯に臣従していたという。しかし同じ世紀中にその領主の娘の婚姻関係によって、カサニョルはヴェネジャン (Vénéjan) の領主ティボー・ドゥ・ベジエ (Thibaud de Béziers) のものとなる。さらに 16 世紀にはローベルジュ (Lauberge) 家が継承するが、大革命をへて、城は 20 世紀に至るまで所有者が次々と入れ替わってゆく。1987 年にはニームの織物企業として知られる「アンディエンヌ・ドゥ・ニーム・ミストラル」

(Indiennes de Nîmes Mistral) の創始者であるリッター家がこれを所有し、修復作業も進められた。城は東側に高さ 13 メートルの大きな方形の塔が立ち、南側はルネサンス様式のテラス、そして北側にはサン＝マルタン教会が建てられている。

カサニョルにあったプリウレの名は、12 世紀後半にはシトー派のフランクヴォー修道院 (Abbaye de Franquevaux) のカルチュレールにその名が現れる。その後、大革命まではニーム司教区に属し、ニームの大聖堂参事会の管理下に置かれていた。16 世紀の宗教戦争の際にプリウレは司祭館と共に破壊された。サン＝マルタン教会はかろうじて南側の壁だけが残されていたが、プロテスタントであった領主はそこに鳩小屋 (colombier) を建てた。

1685 年にナントの勅令が廃止されると、サン＝マルタン教会も修復された。その際ヴォールトも再建されたが、かつての古い聖堂のものよりも 3 分の 1 程度低い位置に架け直されたため、残されていた古い聖堂の南壁に付けられていた壁付き円柱の柱頭部分が、新しいヴォールトよりも上に残される形となってしまった。その柱頭彫刻は、ラングドックの地中海地方でも最も見事なものの 1 つとされる。正面中央には幾人もの人間に囲まれて、一人の人物が堂々たる威厳を持って座っている。王冠らしきものを頭に載せ、目を大きく見開いている。この人物は、P.A.Clément によればヘロデ王であるが、M. Moreau はこの構図を荘厳のキリストであるとしている。柱頭の左側の面には悲痛な面持ちの女性がいて、その足下には一人の人間が倒れている。またこの女性の上の冠板部分には、3 人の小さな人物が列になって歩む姿が彫刻されている。この柱頭彫刻は、現在の聖堂のヴォールトの上にあるために、聖堂の中からは直接見ることができない (つまりそれを見るためには屋根裏に登らなければならない)。

17 世紀に再建されたサン＝マルタン教会は、かつての古い聖堂の南壁が、城を取り囲む壁の一部分となって建てられている。西ファサードはその北側は分厚い扶壁となっている。南側には城壁に作られた古い塔が立ち上がる。ファサード中央には飾り気のない方形の扉口が開き、その上には方形の窓が開けられている。身廊北側には半円頭形の窓が 2 つ開けられているだけで、扶壁などはない。壁面は不整形の石材が乱積みされている。向かって左側に古い建物の土



30.4.10 Cassagnoles

台の一部が残されている。16 世紀に破壊される前の古い聖堂の名残であろうか。聖堂東端には半円形の後陣が付く。中央上部には半円頭形の窓が開けられている。身廊の南側の外壁は、城の中庭から見ることができる。北側とは異なり、南側の壁は整形された中石材のきれいな石積みである。窓が 4 つ開けられているが、そのうち上に並ぶ 2 つはシトー派聖堂時代のロマネスク様式のものと思われる。その壁面の東側には大きな方形の塔が建つ。先にも触れたように、ここには 16 世紀に鳩小屋

が作られた。

聖堂内部は横断アーチによって 2 つのベイに区切られている。西側には石造りの 2 階席（トリビューン）が作られている。これはかつては領主とその家族が使用したものである。第 2 ベイの南側には小さな礼拝室がある。身廊の東側には短い内陣のベイと祭壇が置かれた半円形の後陣が続く。後陣には半ドームが架かる。身廊の天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトであるが、これは先にも述べたように 17 世紀になって古い聖堂よりも低い位置に再建されたものである。

カサニョルのサン＝マルタン教会は、大革命の際には鐘楼が破壊された。その後は理性の祭典が行われる場となり、さらに工場として使用されるなどしたが、近年になって修復作業が進められ、内部も比較的きれいな状態を保ち、現在ではミサなどの祭儀も行われるようになっている。

Bibliographie :

Clément (1993) pp.379-380; Germer-Durand (1868) p.49; Goiffon (1881) p.81; Goiffon (1916) pp.291-298; Moreau (1997) pp.62-63.

30.4.11 サン＝ティレール＝ドゥ＝ブレトマ／サン＝ティレール教会

(Église Saint-Hilaire, Saint-Hilaire-de-Brethmas)

サン＝ティレール＝ドゥ＝ブレトマはアレスのすぐ南に隣接するコミューンである。ただし旧集落にあるサン＝ティレール教会は、アレスから県道 D936 で南へおよそ 7 キロの距離がある。ガルドン＝ダレス川の支流であるアヴェヌ川 (l'Avène) がこの旧集落の近くを流れる。この場所に本格的な定住が見られたのはガロ＝ローマ時代に入ってからで、中世にはオーヴェルニュとラングドックを結んでいたかつてのレゴルダヌの道もこの地を通っていた。

この村は、17 世紀まではニーム司教区に属していたが、1694 年から新たに設置されたアレス (Alais) 司教区に組み込まれた。ただしアレス司教区は 1801 年に廃止され、1877 年からはニーム司教がアレス司教を兼務している。

サン=ティレール教会は、もともとは 9 世紀初め頃までアンデューズにあった女子修道院が所有していたと言われる。ただしこの女子修道院については詳細は不明である。810 年（あるいは 814 年頃）にアニアーヌ修道院に譲られ、さらに 12 世紀半ばにはサンドラス修道院（Abbaye de Cendras [30.4.13]）の所有となっていた。テンプル騎士団との関わりがあったとも言われる。16 世紀の宗教戦争の際に大きな被害を受けた。1687 年にいったん修復されるも、今度は 1702 年にカミザールによって焼かれた。カミザールの首領ジャン・カヴァリエとヴィラル元帥率いる鎮圧軍の使者ランドが 1704 年 5 月に最初の停戦交渉を行ったのは、サン=ティレール=ドゥ=ブレトマの西、現在の県道 D936 がアヴェヌ川を渡る橋「ポン・ダヴェヌ」（pont d'Avène）あたりであったという。その橋の北側にはここで停戦交渉が行われたことを示す記念碑が作られている。なおサン=ティレール教会は 1723 年にいったん再建されたが、大革命の時に再び荒らされた。1834 年までそのまま放置されていたという。

サン=ティレール教会の建設は 12 世紀である。アレス地方では最も規模が大きい聖堂の 1 つであった。ただし現在はかつての身廊部が失われており、南北に延びるトランセプトが身廊として使用されている。トランセプトの南翼の南壁が、扉口の開くファサードとなっている。その扉口自体は聖堂が大々的に修復・再建された 18 世紀以降のもので、より古い半円頭形の出入口のアーチの名残が扉口の向かってすぐ左側の壁面に残されている。扉口の上には大きな半円頭形の窓が開けられている。これも 18 世紀以降のものであろう。壁面は整形された中小石材が、比較的きれいに積み上げられている。現在の西ファサードは、かつての交差部と失われた身廊部の間を埋める形で建てられており、中ほどの高さのところに丸窓が開けられ、ペディメントの上には小さな鐘楼が立てられている。

後陣は半円形で、大きくて高さもある。この後陣の上の方には、菱形彫刻が連続する幾何学文様の美しいコルドン（cordon）がぐるりと水平に巡る。ここから約 4 キロ南のヴェズノーブル（Vézénobres）のロマネスクの家と同様のコルドン装飾が見られるし、また少し離れたサン=ジル（Saint-Gilles [30.3.6a]）のロマネスクの家にも、線刻ではあるが、同じモチーフのコルドンが見られる。サン=ティレール=ドゥ=ブレトマでは、このコルドンの位置が、もともとの後陣の持ち送りの高さを示している。したがってそこから上は 18 世紀に新たにかさ上げされた部分である。壁面もコルドンから下が、整形された中石材がきっちりと積まれた美しいものであるのに対して、コルドンから上はそこまで整形されていない中小の石材が、どちらかと言うと荒く積まれたものとなっている。後陣の下部中央には半円頭形の窓が開けられている。その下の後陣基壇部分にはマルタ十字の彫刻された石が組み込まれている。この主後陣の左右両側には高さが二段構えになったトランセプトがある。両翼とも高さの最も低い東側外壁部は平坦であるが、内部は



30.4.11 Saint-Hilaire-de-Brethmas

半円形の小後陣となっている。開口部はない。

聖堂内部は、先にも述べたように南北方向のかつてのトランセプトが、現在では主身廊の役割を果たしている。主祭壇は北側のトランセプトに置かれている。失われた身廊部との間に作られた壁（現在の西ファサードに相当）と、トランセプトおよび交差部の半円筒形トンネル・ヴォールトは、17世紀の修復の際に再建されたもので、漆喰で白く上塗りされている。それ以外は、修復の手が加えられてはいるが、すべて12世紀ロマネスク期のものである。ヴォールトの高さは南北のトランセプトが約9メートル、交差部が12メートルである。

南北に延びる旧トランセプト（翼廊／袖廊）は、二重の半円アーチを介してそれぞれ交差部に接続する。また交差部とその東側の内陣・後陣部との境にある凱旋アーチ壁も、やはり二重の半円アーチである。このトランセプトは、南北ともに、西側には半円形の壁アーチが付けられ、反対側の東側には三重の半円アーチを介して平面プランが半円形の（ただし外壁は平面の）小後陣が作られている。この三重のアーチの一番東側の（つまり半円形の小後陣に接する）ものの幅が他のアーチよりも広くなっており、これは小後陣に付けられたいわば「小内陣」と見ることも可能かも知れない。これら南北の小後陣には水平のコーニスを介して半ドームが架かる。窓などの開口部は見られない。

交差部の東側は、二重になった半円形の凱旋アーチを介して東西幅の小さな内陣のベイ、そして半円形の主後陣が続く。凱旋アーチは無装飾のコーニスを介して方形のピラストルが受け止めている。このコーニスは主後陣まで連続して巡らされ、その上に半ドームが架かる。主後陣の中央には半円頭形の大きな窓が開けられている（隅切りはされていない）。聖堂内部に並ぶ主後陣とその南北に並ぶ小後陣は、現在は身廊の東側に3つ並ぶ礼拝室といった形になっている。北側トランセプトの北壁には半円頭形の出入口が付けられ、現在の扉口が開く南側トランセプトには木製の2階席が設けられている。

Bibliographie :

André (1988) pp. 21-28, pp.160-164; Clément (1993) pp.111-112; Germer-Durand (1868) p.209; Goiffon (1881) p.297; Goiffon (1916) pp.109-114; RIP.

30.4.12a アレス／サン＝ジャン＝バティスト大聖堂 (Cathédrale Saint-Jean-Baptiste, Alès)

アレスは現在はガール県北部にある人口4万を超える中規模都市で、郡庁(sous-préfecture)所在地である。セヴェンヌ地方の中核都市の1つでもあり、セヴェンヌの山々はガルドン・ダレス川 (le Gardon d'Alès) 沿いのこの街から始まって西と北へ向けて広がっている。アレスの南においては、ガール県北部からエロー県東部にかけてガリーグ (Garrigues) と呼ばれる石灰岩丘陵が広がるが、アレスはガリーグの外側にあって、むしろ石炭を産出するセヴェンヌ炭鉱地帯の中に位置する。実際、19世紀に入ってこの街は、鉱山から掘り出される石炭を中心とした炭鉱産業で栄えることになる。

アレスには、実はロマネスク聖堂はほとんど残っていない。後述するようにサン＝ジャン＝バ

ティスト大聖堂の西ファサードの一部と、旧コルドゥリエ教会の鐘塔の一部 [30.4.12b]、そしてガルドン・ダレス川の西岸に位置するエルミタージュとサン＝ジェルマン＝ドゥ＝モンテギュール小修道院教会の遺構 [30.4.12c] が残されている程度である。しかしこの街はニームとともにガール県の主要都市であり、今も述べたようにセヴェンヌの中核都市である。そこで以下では、このセヴェンヌの都市アレスの歴史を簡単に追っておくことにしたい。

古代のアレスについては、現在の市街においてローマ時代の遺構や遺物がわずかに見つまっているだけで、例えばニームのようなローマ都市の様子を想像することは難しい。古代の住居群は、むしろアレスの市街の西、ガルドン・ダレス川のすぐ対岸にあるエルミタージュの山 [30.4.12b] に集まっていた。

アレスは、17 世紀終わり頃から 20 世紀前半 (1926 年) までは *Alais* と表記されたが、それ以前の中世の間は *Alestum* あるいは *Alest* などと呼ばれた (以下では、現在の名前である「アレス」と表記する)。古くからオーヴェルニュとラングドックを結ぶレゴルダヌの道 (*chemin de Régordane*) の重要な中継地であった。11 世紀には、ベルナル・プレ (*Bernard Pelet*) の名が、アレスの領主として現れる。しかしプレ家の出自およびこの時代のアレスの領主の継承関係については、よく分からないことが多い。プレ家はナルボンヌ副伯 (*vicomte de Narbonne*) の家系に属するとも言われる。ベルナル・プレの子レーモン・プレ (*Raymond Pelet*, 1075-1120/1125) は、トゥールーズ伯レーモン 4 世 (サン＝ジール) 麾下の領主の一人として第 1 回十字軍に参加している。さらに 12 世紀半ばには、ベルナル・プレ (5 世) が婚姻関係によってメルゲイユ (*Melgueil* / 今のモギオ *Mauguio*) の伯となって勢力を拡大していたようである。

このベルナルには息子ベルトラン・プレ (*Bertrand Pelet*) と娘エルメサンド (*Ermessende Pelet*) がいた。ベルトランはアレスの領主の地位を受け継ぐが、メルゲイユ伯位を継いでいた娘エルメサンドは、最初はアンデューズ家のピエール＝ベルモン (*Pierre Bermond d'Anduze*) と結婚し、彼の死後は今度はトゥールーズ伯レーモン 6 世 (*Raymond VI de Toulouse*) と再婚し、彼の最初の妻となった。エルメサンドは最初の夫からアンデューズ家の名を引き継いでおり、結果としてこの時代からアレスはプレ家のベルトランとアンデューズ家のエルメサンドという 2 人の「共同領主」(*co-seigneur*) による支配を受けることとなる (ただし第 1 回十字軍に従軍したレーモン・プレの子供たちからアレスの共同領主支配が始まったとする見方もある)。

ここで言う「共同領主」とは、同じ領地と城を共同で支配するというものではなく、アレスという都市をそれぞれの支配区分に分割し、城もまたそれぞれが自分のものを建設して所有するというものであった。つまりアレスという 1 つの都市の中に、2 つの封建領主の支配地と城が別々にあって、それが併存するのである。したがって、ラ・ロック (*la Roque*) と呼ばれるアレスの岩山 (後にヴォーバン要塞が築かれる高台) には、12 世紀に建設されたプレ家の城とアンデューズ家の 2 つの城が、ほとんど隣接する形で並び立つこととなったのである。

同じ 12 世紀には、聖ヨハネ病院騎士団とテンプル騎士団がそれぞれアレスに居館とそれに付属する礼拝堂を持っていた。聖ヨハネ病院騎士団の居館は街のすぐ北のプレ・サン＝ジャンと

呼ばれる場所にあった（現存せず）。1143年にはバロンであるベルナル・プレ（5世）が、また1173年にはシビル（Sibille）と名乗る身分の高い女性が、それぞれ聖ヨハネ病院騎士団に寄進を行っている。このシビルは、アレスの共同領主プレ家のレーモン2世（または3世／Raymond II ou III Pelet）の妻で、自身がトルバドゥールでもあった別名クララ・ダンデューズという女性と同一人物ではないかと思われる（後述）。テンプル騎士団は街のメインストリートであるグラント・リュ123番地に居館を持ち（現存せず）、またそれとは別に街の外（アンデューズに向かう街道沿いの場所）にもコマンドリーを所有していた（これも現在は消滅）。1307年に国王フィリップ4世によるテンプル騎士団員の一斉逮捕が行われた際には、アレスでは8名の騎士団員が捕らえられて国王の塔（もとはアンデューズ家の塔）に幽閉されたという。またニームやエグ＝モルトで捕らえられた25名の騎士団員もアレスで監禁されている。

1200年には、プレ家とアンデューズ家の共同領主は、街の住民たちに56ヶ条からなる特許状（Charte de coutume）を与えている。これは都市裁判所の設置、住民にある程度の住居・財産についての自由、家畜所有の自由などを認めるもので、レーモン・プレ（Raymond II ou III Pelet）、ベルナル・ダンデューズ（Bernard d'Anduze）およびその息子ピエール・ベルモン（Pierre Bermond）が、アレスのサン＝ジャン＝バティスト教会においてこの特許状にサインしている。その後アレスの街は4人のコンシュラ（執政）と都市参事会によって日常的な都市運営が担われることとなる。

アレス共同領は、1209年に始まった異端カタリ派に対するアルビジョワ十字軍以降、歴史の荒波に飲み込まれることになる。プレ家はフランス国王側、すなわちアルビジョワ十字軍を実際に率いていたシモン・ドゥ・モンフォールに従って戦った。プレ家のレーモン（Raymond II ou III de Pelet）は、1209年7月の悪名高いベジエの虐殺においては、それを実行する側に加わっている。またシモンが1218年にトゥールーズで戦死すると、1220年にその息子のアモーリーにあらためて臣従している。

それに対して、アレスの共同領主であったアンデューズ家はカタリ派とそれを擁護するトゥールーズ伯側について戦った。エルメサンドの家系に連なる後継者でソーヴの領主でもあったピエール＝ベルモン（Pierre-Bermond d'Anduze et de Sauve）は、トゥールーズ伯レーモン6世の娘であるコンスタンス（Constance de Toulouse）を妻としていた。

このようなわけで、アレスにおける共同領主のプレ家とアンデューズ家は、アルビジョワ十字軍においては対立関係にあった。しかしこの十字軍が結果的に国王側の勝利に終わると、アレスにおけるアンデューズ家の領地と城は、必然的に国王に接收されることとなった。アンデューズ家はその後一時的にアレスにおける共同領主権を回復するものの、先のピエール＝ベルモンの息子である同名のピエール＝ベルモン（7世）は引き続きトゥールーズ伯に忠実であったために、最終的にアレスの共同領をすべて没収された（同時に本拠地アンデューズのみならず、ソーヴやソミエールも失った）。国王ルイ9世（サン＝ルイ）は、1254年にアレスにおけるアンデューズ家の城の破壊を命じている（実行は1256年）。

14世紀半ばの百年戦争の時代に入ると、アレスの街は周囲1.9キロの城壁（厚さは1.6m）で囲まれた。大小合わせて10の城門があり、市街は« pans »と呼ばれる10の地区に分けられ

ていた。人口は 5000 を越えていた。しかしペストなどの疫病、傭兵盗賊集団の攻撃、テュシヤンの乱（百年戦争の戦費調達のための増税に反対して 14 世紀後半にオーヴェルニュやラングドックで起こった農民や都市民を中心とした反乱）などの影響で、14 世紀末頃にはアレスの人口は半減していた。

アレスにおけるプレ家の共同領支配は 15 世紀まで継続されるが、それに対してかつてのアンデューズ家支配分は、その後はさまざまな変転を重ねることとなる。1343 年、国王フィリップ 6 世はそれをドファン・ドゥ・ヴィエノワであったアンベール 2 世 (Humbert II, Dauphin de Viennois) に売却した。しかしアンベール 2 世はすぐにそれをボーフォール家のギヨーム・ロジェ 2 世 (Guillaume Roger de Beaufort, 1290-1380/90) に譲渡した。J. Médard によれば、アレスはこの頃に伯領に格上げされている。

ギヨーム・ロジェは 教皇グレゴリウス 11 世の父である。その息子ギヨーム・ロジェ 3 世はしたがって教皇グレゴリウス 11 世の兄弟にあたる。1356 年には、百年戦争における有名なボワティエの戦いで国王ジャン 2 世善良王とともに英軍の捕虜となっている。彼はテュレンヌ副伯でもあり、そのため彼の息子はレーモン・ドゥ・テュレンヌ (Raymond de Turenne) という名で知られる。さらにその娘であるアントワネット・ロジェ (アントワット・ドゥ・テュレンヌ、アレス女伯) は、中世フランス騎士道の鑑と言われる軍人にして詩人のジャン 2 世ル・マングル、別名ブシコー元帥 (Jean II Le Meingre, maréchal Boucicaut) と結婚した。これによりブシコー元帥はアレス伯となった。彼は国王からラングドック総督に任じられるも、英仏百年戦争においてこれもまたよく知られる 1415 年 10 月のアジャンクールの戦いで英軍の捕虜になり、1421 年 6 月にヨークシャーで没した。ブシコー元帥の妻であったアントワネットは、夫の死に先立つこと 5 年前の 1416 年 7 月 14 日に、領地であったここアレスの城（プレ家の城に対して伯の城あるいは国王の城と呼ばれる）において没している。

アレスにおけるボーフォール家の支配地が伯領であったのに対して、アレスの共同領主であったプレ家は、その支配地であるバロニー（男爵領）を 1509 年まで継承した。しかしその年、プレ家はイタリア商人でアヴィニオンにいたカンビ家のドミニク (Dominique de Cambis) にアレスのバロニーを売却した。カンビ家はもとはイタリア・トスカーナの貴族で、その出自は 13 世紀にまでさかのぼる。アレスのバロンとなったカンビ家は 16 世紀後半の宗教戦争において、一時的にプロテスタント（ユグノー）側に立って、例えば 1560 年にルイ・ドゥ・カンビがコンデ公の代官となるなどしたが、最終的にはフランソワ・ドゥ・カンビがカトリック側に与してアレスのプロテスタントを攻撃・弾圧した。国王アンリ 3 世は、フランソワ・ドゥ・カンビのこの働きに報いるために、彼のバロニーを副伯領 (vicomté) に格上げしている。

一方アレス伯のボーフォール家によるアレス共同領支配は 16 世紀後半まで続くが、1575 年になって、ラングドック総督だったモンモランシー公アンリ 1 世ダンヴィル (Henri Ier de Montmorency Damville、生没年は 1534-1614 年) がアレス伯マルク・ドゥ・ボーフォールと領地交換によって、アレス伯領を獲得した。アンリ 1 世ダンヴィルは次第にアレスの副伯領（かつてのバロニー）の権益を吸収し、一時的にアレスの伯領と副伯領を合体させた（ただしほどなくして再び副伯領を手放している）。彼は基本的にはカトリックであったが、しばしばプロテ

スタント側と共謀して国王（アンリ 3 世、アンリ 4 世）と対立したことで知られる。彼の息子モンモランシー公アンリ 2 世は、父の跡を継いでラングドック総督となり、ナントの勅令（1598 年）以降もしばしば反乱を起こしていたプロテスタント勢力と戦った。また 1628 年 10 月 28 日にリシュリユーがラ・ロッシェルを陥落させた後も、南フランスにおいて反乱を継続していたプロテスタントのロアン公アンリ（Henri II de Rohan, 1579-1638）と戦ってこれを破っている。しかし 1629 年の「アレスの和議」（後述）の後には、国王ルイ 13 世の王弟オルレアン公ガストン（Gaston d'Orléans）と共謀してリシュリユーに対し反乱を起こし、カステルノーダリの戦い（1632 年 9 月 1 日）で敗北した後、同年の 10 月 30 日トゥールーズで断頭刑に処せられた。

モンモランシー家のアレス伯位とその領地は、1601 年にモンモランシー公アンリ 1 世の娘シャルロット＝マルグリット（Charlotte-Marguerite de Montmorency）が継承していた。彼女はヴァロワ＝アングレーム家のシャルル（Charles de Valois-Angoulême）と結婚し、アレス伯位は今度はアングレーム家が引き継いでゆく。一方、かつてペレ家の領分であった副伯領は 17 世紀半ばからベラルール＝モンタレ（Bérard-Montalet）家が手に入れ、大革命をへて 20 世紀に至るまでアレス男爵（baron d'Alès）を名乗った。現在のアレス市の紋章は赤地に白い鳥の羽であるが、これはこのベラルール＝モンタレ家の紋章を用いたものである。

フランス宗教戦争期には、カトリックとプロテスタントがアレスをめぐる激しい争奪を繰り返した。1567 年 9 月 29-30 日の「ミシュラード虐殺事件」ではプロテスタントによって 43 人のカトリックが殺された。サン＝ジャン教会の中では聖堂参事会員 7 名が殺されている。1568 年にはラングドック、プロヴァンス、ドフィネのユグノー軍がアレスに集結しているが、1569 年にカトリックがこの街を奪回している。1570 年のサン＝ジェルマンの和約を受けてプロテスタントに祭儀の自由が認められ、アレスにもプロテスタントの寺院が建設される。しかしサン＝バルテルミーの虐殺事件（1572 年 8 月 24 日）が起こるとそのすぐ後に国王軍がアレスに進軍し、プロテスタントの多くが殺されたという。その後一時的にカトリックがアレスを支配するものの、1575 年には再びプロテスタントが優勢となった。

アンリ 4 世による 1598 年の「ナントの勅令」によって、宗教戦争はいったんは収束するが、1610 年にそのアンリ 4 世が暗殺されると政情は再び不安定化した。プロテスタントのリーダーであるロアン公アンリが弟であるスービーズ公（正確にはバロン／Benjamin de Rohan, baron de Soubise）とともに、ルイ 13 世とリシュリユーに対して反乱を起こした。これに対して国王軍は南フランスに進軍し、ラングドックのプロテスタントを虐殺した。ロアン公は 1622 年 10 月にルイ 13 世との間で「モンペリエの講和」を結んだ。しかしこの講和によってプロテスタントに認められる安全保障都市はラ・ロッシェルとモンターバンだけに限られてしまった。

1628 年 10 月 28 日にリシュリユーがラ・ロッシェルを陥落させると、ロアン公は南仏において戦闘を再開する。ルイ 13 世とリシュリユーはすぐさま南部へと軍を進め、1629 年 5 月にはブリヴァ（Privas／オック語ではブリヴァス。現在のアルデッシュ県）を攻め、立て籠もっていたプロテスタントを弾圧・虐殺した。その後、国王軍はセヴェンヌを南下して 1629 年 6 月 9 日にアレスに到達した。アレスの守備隊の数は 2300 名であったが、それに対してアレスを

攻囲する国王軍の兵士の数はその十倍の 23000 名であった。この兵力差はいかんともし難く、6 月 17 日（日曜日）の朝、9 日間の攻囲の末に、アレスは国王の前に降伏した。プロテスタントは、二度と王に反抗しないと誓うことで、ロアン公アンリが退却していたアンデューズ方面へ向かうことが許された。これはブリヴァとは比較にならないほどの寛大な措置であったとされる。

アレスからプロテスタントを駆逐することに成功したルイ 13 世とリシュリユーは、軍を率いて意気揚々とこの街に入城し、ドミニコ会の礼拝堂でテ・デウムを歌って勝利を祝ったという。そして 1629 年 6 月 28 日、リシュリユーはロアン公アンリと講和条約である「アレスの和議」（Paix d'Alès）を結んだ。この和議は別名「恩恵勅令」（Édit de grâce）とも言い、反乱の首謀者ロアン公アンリを助命するものであった。ロアン公は家族とともにイタリアのヴェネツィアに亡命した。

20 世紀前半に活躍したドイツの歴史家マイネッケはその著『近代史における国家理性の理念』においてロアン公アンリについて論じたが、それによるとヴェネツィアに亡命した後ロアン公はしばらくの間そこで著述活動に専念し、1631-1632 年頃に『キリスト教世界の君主及び国家の利害について』（*De l'intérêt des princes et des États de la chrétienté*）を書いた。この著作が出版されたのは 1638 年で、アレスで自分を破ったうえで恩赦を与えたリシュリユー枢機卿に献呈されている（献辞の日付は 1634 年 8 月 1 日）。晩年はすっかり「リシュリユーの政策の僕」となって、グラウビュンデン（スイス）とヴェルトリン（オーストリア）などでリシュリユーとフランスのために軍隊を率い、スペイン（ハプスブルグ家）と戦った。しかし最後は再びリシュリユーの猜疑を受け、ザクセン・ヴァイマル公の軍に逃れるが、ラインフェルデン（スイス）の戦いで受けた致命傷がもとで 1638 年 4 月 13 日に 58 歳で没したのであった。マイネッケによると、アンリ 4 世という理想像によってプロテスタント（ユグノー）的信念、貴族的王朝の野心、そしてリシュリユー的国家精神の 3 つが一人の個人の中で結びついたロアン公アンリは、複雑な宗教的・国際的対立が繰り広げられた激動の宗教戦争と三十年戦争の争乱を生き抜いた、まさに「17 世紀フランスのもっとも強力な政治的個性の一人」なのであった。

ところで「アレスの和議」（実際にはアレスの南およそ 17 キロのレディニャン Lédignan で調印された）は、プロテスタントに信仰の自由と祭儀の自由を認めはしたものの、政治的集会などの権利は否定され、結果的に「ナントの勅令」でプロテスタントに認められていた活動の実際を、よりいっそう制限するものとなった。プロテスタントの安全保障地域もすべて削減された。この動きはカトリックによるフランス再征服の始まりであり、半世紀後のルイ 14 世による「ナントの勅令の廃止」（1685 年）を準備するものであった。なお、アレス開城の後、ルイ 13 世が滞在したとされる館「オーヴェルジュ・デュ・コック・アルディ」（auberge du Coq Hardi）はアレスのメイン・ストリートであったグランド・リュ（Grande Rue）に 20 世紀まで残っていたが、1950-1960 年代に進められたアレス市街南西地区の再開発によってグランド・リュごと（つまりその地区の歴史的な町並みごとすべて）取り壊されて消滅してしまった。

さて先にも触れたように、中世の間アレスのラ・ロック（岩山）には、共同領主の 2 つの城

と塔があった。特にその塔は 50 メートル以上の高さがあり、封建権力の象徴としてアレスの住民および街の周辺に住む農民たちを見下ろしていた。1 つはラ・ロックの西側に立つもので「プレ家の塔」(Tour Péletine) と呼ばれた。東側に立つ塔は、もとはアンデューズ家が建設し、後に国王がアルビジョワ十字軍の後の 1236-1343 年の間所有することになる「国王の塔」(Tour royale) である。それらの塔はともに 1160-1165 年頃に建設されたとされるが、17 世紀前半の宗教戦争の際に破壊されてしまった。

1685 年のルイ 14 世による「ナントの勅令」廃止の翌年、アレスの 2 つの城を完全に取り壊して、新たにそこに、モンペリエを手本にしてヴォーバン様式の要塞 (citadelle/fort de Vauban) を建設することが決まった。建設の総責任者には、王国建築技師のフランソワ・フェリー (François Ferry, 1649-1701) が任命された (ヴォーバン自身はアレスには来なかった)。フェリーはフランス各地に要塞を建設したことで知られ、ガール県では、ニームやサン=イポリット=デュ=フォール (Saint-Hippolyte-du-Fort) などの要塞が彼の手によるものである。アレスの新しい要塞は 1688 年に完成した。王国軍が駐屯するとともに、プロテスタントの監視と彼らを収監する監獄としても使用された。大革命後も引き続き兵舎や監獄として使用されたが、1989 年からはアレス市の各種行政オフィスが入っている。国王の城があったラ・ロックの東側部分には、現在は新しく大きな公営駐車場 (Parking de la Maréchale) が建っている。

アレスの中世に関して、13 世紀に花開いた文化史的一幕についても触れておこう。その世紀の前半に、アレスに生きた女性クララ・ダンデューズ (Clara d'Anduze, v.1195-v.1257/v.1216-1275) は、領主の娘にして同時代に活躍したトルバドゥール (吟遊詩人) の一人であった。オック語では女性のトルバドゥールは「トロバイリッツ」(trobairitz) と言う。彼女の存在は必ずしも確実なものではないとする見方もあるが、おそらくはアレス共同領主であったアンデューズ家のベルナル 7 世 (Bernard VII d'Anduze) の娘で、さらに同じアレスの共同領主であったプレ家のレーモン・プレ (Raymond II ou III Pelet) の妻となったシビル (Sybille) と同一人物ではないかとされる。彼女は夫とは別に、トルバドゥールのウク・ドゥ・サン・シルク (Huc ou Uc de Saint-Circ) に対する熱烈な愛を歌った恋愛詩を残し、彼もまたクララを讃える歌を作っている。同じくトルバドゥールのポン・ドゥ・キャブドゥイユ (Pons de Capdeuil) もまた彼女を讃えている。このエピソードは、やはり女性トルバドゥールであったディー女伯ベアトリスの恋愛物語を思い起こさせるものである [Die/26.3.19a]。なお、クララの胸像がアンデューズのコルドゥリエ公園 (Parc des Cordeliers) にある。最初に作られたのは 1895 年のことで、もとは銅像であった。しかし第二次大戦におけるドイツ占領中の 1942 年に溶かされてしまい、1954 年になって石像が再建された。

現在のサン=ジャン=バティスト大聖堂がある場所には、8 世紀のカロリング時代には同じくサン=ジャン=バティストの名を冠する小さな洗礼堂 (Baptistère Saint-Jean-Baptiste d'Arisitum) があった。その洗礼堂自体、古代の神殿の跡に建てられたものであったとされる。10 世紀になって、サンドラス修道院 (アレスの北およそ 6 キロ [30.4.13]) の修道士たちがそこに分院となるプリウレ (Prieuré Saint-Jean-Baptiste) を創建した (最初にそのプリウレを

創建したのはアニアーヌの修道士たちだったとも言われる)。このロマネスク初期のブリウレは、「Cella」と呼ばれる小礼拝堂、修道士居館、クロワトル、女子修道院 (cellula/couvent)、農作業用の建物、助修士居館、巡礼やユダヤ人のための宿などからなっていたという。

11世紀後半から12世紀頃にかけて、聖堂はさらに大きなものに拡張された。1098年、先述したアレスの領主レーモン・プレが十字軍に出発したのはこの時期のことと思われる。1118年12月、教皇グラシウス2世(在位1118-1119年)がこの聖堂を訪れており、この時の記録が史料における初出である。また教皇アレクサンデル3世(在位1159-1181年)も1163年にここを訪れている。1166年、ブラバントとバスクの盗賊部隊がアレスを襲撃し、街とブリウレの聖堂を焼いたが、修復工事はすぐに行われたようである。アレスの共同領主であったプレ家とアンデューズ家は、それぞれ自分たちの城に付属する城塞礼拝堂を持っていたが、既に述べた1200年の共同領主による特許状の署名は、このサン=ジャン=バティスト教会で行われた。

アルビジョワ十字軍(1209-1229年)の後、1254年にルイ9世(サン=ルイ)がここを訪れている。しかしながらこの十字軍の争乱によってアレスのブリウレとサン=ジャン=バティスト教会が受けた被害は大きかったため、13世紀には母院であるサンドラス修道院の主導によって、ラングドック・ゴシック様式で聖堂の再建が進められた。さらに1430年から、聖堂の西ファサードに接する形で大きな鐘塔が建設された(完成は1432年あるいは1438年)。この鐘塔の上には銅で覆われたドームが載せられていたが、これは1775年の落雷で破壊されている。

サン=ジャン=バティスト教会はアレスの教区教会でもあったが、1472年にサン=ジャン=バティスト・コレジアル教会へと格上げされた。コレジアル(聖堂参事会教会)になったからと言って、建物自体に何か新しい修復や増築の手が加えられたわけではない。宗教戦争の時代の1561年、鐘塔の要塞化工事が行われた。これはその時にアレスの街を支配していたプロテスタント側によって実施されたもので、王国軍の攻撃に対処するものであった。コレジアルの鐘塔は、この街のドンジョンとしての役割も果たしたが、カトリックとプロテスタントの争いの中で破壊され、コレジアル自体も半ば廃墟化した。1580-1590年に、アレス伯であったモンモランシー家(特にアレス女伯シャルロット=マルグリット)の保護のもとで一部再建されるも、今度はこの街をカトリックから奪回しようとするロアン公アンリによって再び被害地を受ける。1629年の「アレスの和議」の時には、鐘塔(頭頂部は破壊)と、身廊の西側の壁(西ファサード)が残っただけという有り様であった。何度目かの修復・再建工事が始まったのは1663年のことであった。この時の再建は、13世紀の平面プランをおおよそ踏襲し、聖堂全体は広い身廊とその両側に大きな扶壁と礼拝室が並ぶという後期南仏ゴシック様式によるものであった。1684年にはアレス男爵ジャック・ドゥ・ベラル(Jacques de Bérard)が内陣に葬られている。

アレスはもともとニーム司教区に属していた。1687年、プロテスタントに対抗しそれを抑えるために、セヴェンヌ司教区の設置(その中心都市はアレス)が検討されたがこの時には実現せず、1694年になって国王ルイ14世の後押しもあって、ようやくアレスに司教区が設置された。それに従ってサン=ジャン=バティスト・コレジアル教会は大聖堂(カテドラル/司教座

聖堂）となった。1699 年から、大聖堂の拡張工事が計画されるが、カミザール戦争（1702・1705 年）の混乱もあって実現しなかった。

1663 年から聖堂の再建工事が進められた。しかし全体として装飾などはほとんどなく、堂内も簡素なままであった。その後は 18 世紀にかけて漸次堂内の装飾や調度類が整えられていった。1742 年には内陣も豪華なものになり、主祭壇も大きなものに変えられた。身廊部との間の木製の仕切りバラスターは鉄製のものに変えられ、聖具室との出入口も大きく広



30.4.12a Cathédrale Saint-Jean-Baptiste, Alès

げられた。身廊には立派な説教壇が据え付けられた。1771 年からは、建物自体についても修復と拡張の工事が進められ、その間の 1776 年には鐘塔の上に鉄製の尖塔を持つカンパニールが据えられた。1780 年 5 月 7 日、こうして装いを新たにした大聖堂において、あらためて献堂式が行われたのであった。

大革命の後、1801 年 11 月 29 日にアレス司教区は廃止された。そこに属していた中小の教区は、アヴィニオン、マンド、ニームなどの司教区に再編された。最後のアレス司教はドゥ・ボーセ（Mgr de Beausset）であった。1877 年からはアレス司教のタイトルは復活するが、ニーム司教がそれを兼ねる形になっている。大聖堂は 21 世紀になっても補修工事が続けられており、最近では 2020 年から 2 年の歳月をかけて、状態が悪かった身廊と内陣のフレスコ壁画と装飾（19 世紀）がきれいに修復された。

アレスのサン＝ジャン＝バティスト大聖堂は、その大半が宗教戦争で破壊された後、17 世紀に再建されたものである。身廊の東西長は 30.5 メートルで、後陣まで含めると 38 メートル、西ファサードの南北幅は約 23.2 メートルである。西ファサードに付けられた鐘塔は平面がおおよそ 7 メートル四方の正方形で（ただし一番下のポーチの内部は南北幅が少し長い長方形）、塔の高さは約 28 メートルである。

西ファサードは壁面の下半分が 12 世紀ロマネスク期のものである。P.J. Roux によればそのうち最も古いのは土台部分で、10 世紀にまでさかのぼるという。その上には 12 世紀の石積みが続き、上半分は 17 世紀に再建されたものである。方形の鐘塔（1430 年代）がファサードに接する形で建てられてその中央部分を隠しているため、西ファサード全体を見ることはできない。つまり現在目にすることができるのは鐘塔に隠されていないファサードの左右の壁面のみである。ニーム大聖堂のファサードのような古代の大石材による石積みは、アレスの西ファサードには見られない。その基壇部分は、特に向かって右側の壁面においては中石材の石積みである。

西ファサードの向かって左側壁面には、16 世紀の宗教戦争による損傷跡が認められる。中ほどの高さの所に、ロマネスク様式の窓が残されている。半円頭形で縦長の窓で、二重の半円形

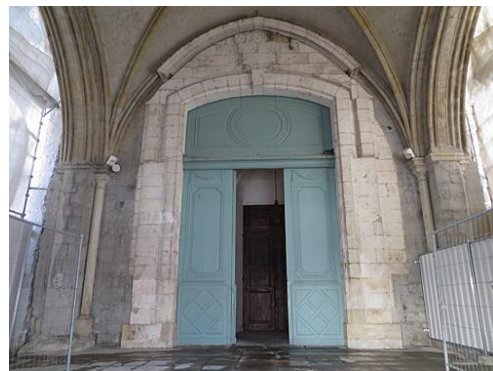
アーキヴォルトが架けられている。外側のアーキヴォルトの左右は、細い小円柱が冠板と植物文様の彫刻された柱頭を介して受け止めている（向かって左側の小円柱と柱頭は修復されたもの）。内側のアーキヴォルトは縦長のクラヴォーが組まれたものである。この窓は、聖堂内部においては、オルガンの隣に大きく隅切りされた形で開いている。西ファサード左側壁面の窓の下（地面から約 1 メートルの所）には、中世に度量衡として用いられたと思われる横溝彫（rainures étalons des mesures）が埋め込まれている。

西ファサードの向かって右側壁面は、左側壁面よりも保存状態が良い。ここにも左側壁面と同じ仕様のロマネスク様式の窓が開けられている。小円柱の柱身と柱頭の上の冠板は修復されたものである。左側壁面の窓と同じく、聖堂内部では大きく隅切りされた形でオルガンの隣に開かれている。この右側壁面には、鐘塔との境目の角部に 1656 年に内部が螺旋階段（vis）となった小塔が、ロマネスクの窓の少し上のところから鐘塔の最上部まで続く形で作られている。この小塔には一定間隔で方形の開口部が付けられている。これは 16 世紀にこの鐘塔が要塞化された名残であろう。また螺旋階段の小塔の下の方扇形コーベル（coquille）のさらにそのすぐ下には、天使あるいは人間の頭の彫刻が埋め込まれているのが見える。

15 世紀に西ファサードに鐘塔が増築される前の、遮るものの何もないロマネスク期の西ファサードの中央には、左右の壁面の窓よりも少し高い位置に、やはりロマネスク様式の窓が開けられていたと考えられる。その窓はファサードの内側にやはり大きく隅切りされた形で残されているが、2 階部分に大きなオルガン（18 世紀）が据え付けられているために、残念ながらそれを見ることはできない。

2 つのロマネスク様式の窓が左右に並ぶ西ファサードのこのような外観は、P.J. Roux によれば、例えばセナンク（Sénanque）の西ファサード（12 世紀末-13 世紀初め頃）と似ているという。ただし、やはり P.J. Roux によると、ロマネスク期のアレスの西ファサードには、扉口とその上に開けられた中央の窓をその中に収める三角形の切妻形ポーチが作られていたという。このような切妻形ポーチは、プロヴァンスのル・ートル（Le Thor）のノートル＝ダム＝デュ＝ラック教会、タラスコンのサン＝ガブリエル礼拝堂、あるいはヴォークリューズではアヴィニヨンのノートル＝ダム＝デ＝ドム大聖堂などに見られるものである。さらに東のアルプス地方に向かうと、同様の例はさらに増える。

P.J. Roux は、西ファサードの一番上には、鐘を吊すベイが横に 3 つ並んだ切妻形の大きな鐘楼が作られていたと考えている。現在の鐘塔は 1432 年に完成した方形の大きなものである。鐘塔ポーチは、北・南・西に向けて出入口となるアーチが開いている。そのうちの西面の出入口には、モールディングが幾重にも重ねられた尖頭形のアーキヴォルト（アーチ）



30.4.12a le portail de la Cathédrale d'Alès

が架けられている。ゴシック様式の見事なもので、一番内側のアーキヴォルトは植物文様の彫刻された柱頭を持つ円柱が、また外側のアーキヴォルトは方形の側柱が受けるが、そこにはゴシック様式の彫刻が施されたモディオンが付けられている。この一番外側のアーキヴォルトにはダイヤ柄の連続文様が彫刻されている。

この出入口の、向かって右側壁面の下部（地上から約 1 メートルの高さの所）に、ラテン語の墓碑が埋め込まれている。1251 年のもので、一部がかなり破損しているが「**Maître Bernard**



30.4.12a l'intérieur de la Cathédrale d'Alès

Dorlac, prêtre」という内容が刻まれている。メートル (**Maître**) は、テンプル騎士団の管区長などの上級管理者を表す。このベルナル・ドルラックという人物は、騎士団の幹部であると同時に司祭の資格も持っていたようである。すでに触れたように、テンプル騎士団の上級管理者は、聖ヨハネ病院騎士団とともに、アレスに居館やコマンドリーを所有していた。

鐘塔ポーチの内部は、南北方向に少し長くなった方形の平面プランで、天井には 4 分交差リブ・ヴォールトが架けられている。聖堂に入るための扉口は、17 世紀以降に再建されたもので、セグメンタル・アーチの下に大きな扉が付けられている。

身廊から後陣にかけての建物は 17 世紀以降の新古典主義で再建されたもので、その外観には古さはほとんど感じられない。身廊部には各ペイの高い位置に 1 つずつ開けられた大きな縦長の窓が並ぶ。その下には南北両側に出張る形で礼拝室が並び、四角いモールディングとその中に開けられたやはり四角い窓が並ぶ。さらに北西角、北東角、南東角、南西角には左右を丸窓に挟まれた三角形のペディメントと方形の扉が付けられている。ただし北東角、南東角のものはニッチである。また後陣の中央には、セグメンタル・ペディメントの下に大きくて縦に長い卵形装飾があり、さらにその下に方形の出入口が付けられている。

サン＝ジャン＝バティスト大聖堂の内部は、4 ペイからなる単身廊形式で、各ペイの南北に作られた礼拝室が並ぶ。それらの礼拝室の上にはバラスターが付けられたトリビューンが並ぶ。トリビューンに並ぶ各ペイには大きな半円頭形の窓が開けられ、ステンドグラスがはめられている。身廊の天井は 4 分交差リブ・ヴォールトで、その高さは約 20 メートルである。身廊の東は石造りのバラスターを隔てて内陣となるが、その南北両側には、鉄製の欄干を隔てる形で、ローマ風のコリント式の円柱（縦溝付）とその上の三角形のペディメントを持つ礼拝室が、あたかもトランセプトのようにして作られている。内陣には 18 世紀の見事な主祭壇が置かれている。内陣の東側は半円形の後陣で、やはりコリント式の太い縦溝付の円柱が 8 本並び（18 世紀のルイ 16 世様式の列柱）、それらの円柱の間に 5 つの大きな半円頭形の窓が開けられている。その円柱の上には、ラテン語の碑銘が記された大きくて豪華なコーニスが巡り、その上には 5 つの区画に分けられた半ドームが架かる。後陣の列柱の下には木製の聖職者席が巡り、その最東端には小さなオルガンが置かれている。堂内は、先にも触れたように 2020 年から 2 年

間をかけて、調度類やフレスコ画の修復が行われた。とりわけ内陣の天井と後陣の半ドームのフレスコ画が色鮮やかで美しいものとなっている。

Bibliographie :

森川 (1999) 72-83 頁; マイネッケ、フリードリヒ (2016) 172-229 頁; André (1995) pp.9-11, pp.45-47, pp.62-64; Aubarbier (2007) pp.259-260; Bardon (1869) pp.13-35, pp.163-191; Bardon (1894) pp.9-27; Baubérot (1987) pp.67-72; Chabrol et Vezon (2017) pp.16-19, pp.22-27, pp.31-37, pp.41-60, pp.103-105; Cottle (2002) pp.37-38; Devic et Vaissète (1879) pp.44-69, pp.205-207, pp.319-334, p.510, p.524-535, p.794; Hubac (2010) pp.11-81; Malbos (1977) pp.202-229; Martinaud (2023) pp.187-206; Maurette, et al. (1860) p.3-5; Médard (1992) pp.9-22, pp.203-205; Moreau (1997) p.24; Pérouse de Montclos (1996) pp.122-124; Pugnière (2000) pp.87-99; Roux (1953) pp.15-33, p.46, p.61, pp.113-149; Ville d'Alès (2016) pp.4-9, pp.13-15; RIP.

30.4.12b アレス／旧コルドゥリエ教会 (Ancienne Église des Cordeliers, Alès) 遺構

アレスのサン＝ジャン＝バティスト大聖堂からロラン通りを北へ約 150 メートルである。ロータリーとなっている市役所広場 (Place de l'Hôtel de ville) の北側に建っている。コルドゥリエ会とは、フランシスコ修道会 (別名「小さき兄弟会」) から派生した修道会である。フランシスコ修道会は、言うまでもなく 1209 年にアッシジのフランチェスコによって設立されたもので、1210 年に教皇インノケンティウス 3 世によってその会則が認められた後、1223 年になって教皇ホノリウス 3 世によって正式に認可された。16 世紀にフランシスコ会、コンベントゥアル聖フランシスコ修道会、カプチン・フランシスコ修道会に別れたが、コルドゥリエはそのうちのコンベントゥアル聖フランシスコ修道会あるいはコンベントゥアル小さき兄弟会 (Frères mineurs conventuels) のフランスにおける別名である。修道士が腰に巻いた 3 つの結び目のある紐 (cordelière) で知られる。

アレスにおけるフランシスコ修道会の存在は、1309 年に確認される。最初は共同領主の 2 つの城を取り囲むラ・ロックの城壁のすぐ外側 (東側) に修道院の建物を持っていた (現在の Place de la Maréchale)。14 世紀後半以降、もっと南寄りのコレジアル (後の大聖堂) に近い場所に移った。現在遺構が残るのはその場所である。もともとそこにはテンブル騎士団の居館と礼拝堂があった。あるいは 12-13 世紀のロマネスク聖堂があったとも言われる。コルドゥリエはそこに 14-15 世紀頃にかけて自らの聖堂を建設した。1686 年にはそれをさ



30.4.12b Église des Cordeliers d'Alès

らに新しい聖堂に建て替えた。

現在残された遺構は、すらりとした方形の鐘塔とそこから東に続く身廊の北側部分である。高さのある 3 つの大きな半円形アーチの連続する聖堂の断面を見ることができる。ロマネスク期にまで遡る古い聖堂の名残は、鐘塔の土台部分に残されているとも言われるが、明確には判別が難しい。この旧コルドゥリエ教会は、現在はアレス市の観光案内オフィスが入居して観光客を迎え入れている。

Bibliographie :

Médard (1992) p.24; Pugnière (2000) p.88.

30.4.12c アレス／ノートル＝ダム＝デ＝ミヌ隠修礼拝堂

(Chapelle de l'Ermitage de Notre-Dame-des-Mines, Alès)

別名「ノートル＝ダム＝ドゥ＝レルミターージュ礼拝堂」とも、あるいはもっとシンプルに「アレスのエルミターージュ」とも呼ばれる。エルミターージュは、一人ないしごく少数の隠修士（エルミット）が孤独な隠修生活を送る修道院ないし修行の場である。アレスの市街の西を流れるガルドン・ダレス川の対岸にあるロシュベル (Rochebelle) 地区からいくつかある細い登り道を歩いて約 100 メートルである。ただしこの登り道はどれも分かりにくい。クルマだとまずアレスの街からガルドン・ダレス川を渡ってその西岸を走る県道 D385a に出る。ロシュベルの南およそ 350 メートルにあるロータリーから「Site de l'Ermitage」の標識に従って D50 に入って西へ 1.2 キロでサン＝ラビィ (Saint-Raby) 地区となる。そこからさらに「Promnade de l'Ermitage」に入って 1.7 キロである。「L'Ermirage」という標識に従って行くと、標高およそ 290 メートルの山の上に建つエルミターージュに至る。そこにはアレスの街を一望できる大きなパノラマが広がっている。

エルミターージュがある小山は先史時代から人が住み、その住居であったと思われる洞窟などもいくつか見つかっている。山の東側斜面では紀元前 6-5 世紀の陶器類も発見されている。この山の上には、紀元前 2-1 世紀頃、ガリア人（ヴォルカエ・アレコミク族）による広さ約 900 平方メートルのオッピドゥム（要塞集落）が作られていた。そのオッピドゥムを取り囲んでいた周壁の遺構がエルミターージュの北側に残されている。このオッピドゥムは、交易活動も盛んであったようで、アンフォラその他の陶器類、ニームやマルセイユ、そして今のオーヴェルニュなどで使用されていた貨幣も数多く見つかっている。

紀元前 2 世紀後半以降は、エルミターージュの小山の頂上付近（東側斜面）にいくつかの大きな住居が営まれていた。2006 年から発掘調査が進められ、2008 年にはその住居の 1 つから 36 平方メートルもの大きさの見事なローマ風床モザイクが発見されている。連続するギリシア雷文、波文様（丸い波頭文）、四角形や三角形の幾何学的連続文、植物のランソー、鳥や魚といった生き物などが色鮮やかな色彩で表されている。この住居はオッピドゥムにおける有力者のもので、モザイクは紀元前 50 年頃のもものとされる。時期的にはカエサルがガリア征服戦争（紀元前 58-51 年）の頃であるので、これはローマ進出の初期の頃において、ガリアとローマとい

う 2 つの文化が結び合わされた珍しい例であると言えよう。古代の集落はその後紀元前 1 世紀末頃にはいったん放棄されたようで、帝政後期になると、住民たちの多くは山を下りてガルドン川近くの低い場所に移っている。その次に集落が見られるのは中世前期の 4-5 世紀のことであるが、6 世紀には再び放棄されたようで、その後この場所が歴史に登場するのは、12 世紀にエルミタージュ（隠修修道院）が作られた時のことである。

もとはケルト時代の聖域でもあったこの場所（古代の墓も数多く見つかった）に、11-12 世紀に隠修修道院と礼拝堂を創建したのは、ここから直線距離にして約 1 キロ南の山上にあるサン=ジェルマン=ドウ=モンテギュー小修道院（Priuré de Saint-Germain-de-Montaigu [30.4.12d]）の修道士たちであった。彼らはアウグスティヌス会の修道士で、老齢であったり病気があったりした修道士たちの療養所としてここに分院を建設したのであった。最初このエルミタージュはサン=ジュリアン=デ=コース（L'Ermitage de Saint-Julien-des-Causses）と呼ばれた。14-15 世紀の百年戦争の際に被害を受け、修復された。宗教戦争の時代の 1561 年 12 月、アレス男爵でプロテスタントと結んでいたジャック・ドウ・カンビ（Jacques de Cambis）が率いる部隊によって攻撃を受けて損傷した。

ルイ 13 世とリシュリユーによる 1629 年のアレス攻囲の際には、プロテスタントのリーダーであったロアン公アンリ配下の部隊がこのエルミタージュを攻撃し、占拠している。17 世紀の間にエルミタージュの隠修士居館は失われ、礼拝堂も半ば廃墟化し放棄された。1675 年、ジャン・サロモン（Jean Salomon）という隠修士が、ニーム司教の承諾のもとここにやって来て、廃墟化していた建物で隠修生活を再開した。彼の後にもここで隠修生活を送るものが続いた。

1718 年、カルメル会の修道士エスプリ・ボワイエ（Esprit Boyer）がエルミタージュを再建し、建物も拡張した。その工事は 1736 年にひとまず終わった。しかし大革命の後は、国有財産として売却され、所有者が次々と入れ替わる。コレラがセヴェンヌで流行した 1854 年、当時の所有者であったロシュベルのブルリー神父（abbé Bourelly）は、もしも聖母マリアがこの疫病からアレスの街を救ってくれるなら、このエルミタージュを聖母に捧げることを誓ったが、結局幸いにもそれが実現することとなった。エルミタージュは 1872 年 12 月 8 日に、ニーム司教によって「ノートル=ダム=デ=ミヌ礼拝堂」という現在の名で献堂された。「ミヌ」（Mines）は「鉱山」を意味したが、これはアレスの石炭産業に結びつく名前であった。

その後はアレスを中心として近隣から数多くの巡礼たちがここを訪れるようになった。1874 年、ピラミッド型の台座に載せられた 5 メートルを超える大きな白い聖母像が礼拝堂の上に据えられた。これはアレスで鑄造されたもので、エルミタージュで行われたそれを祝う式典には、アレスの炭鉱労働者も含めて 1 万 3 千人もの人々が集まったとされる。しかしこのマリア像は、1998 年の嵐の際に落雷で破損してしまい、翌年修復された。1878 年にブルリー神父が 66 歳で亡くなると、彼はこのエルミタージュ礼拝堂に葬られた。

現在残る礼拝堂は、山の頂上にある大きな電波塔のすぐ隣にあって、後陣を東（正確には 20 度ほど北方向に傾く）に向け、アレスの街のパノラマを見下ろすようにして建っている。建物の北側では、身廊部との境に太い扶壁が付けられており（南側の扶壁は削り取られている）、その扶壁から東側の内陣と半円形の後陣が、12 世紀のロマネスク期のものである。最上部を除い

て、きれいに整形された中石材がきっちりと積み込まれた、ロマネスク特有の石積みである。後陣の南側には半円頭形で外に向けて隅切りされた窓が開けられている。これもまたロマネスクに典型的に見られる開口部である。後陣の東端には近代になって無残にも方形の出入口が開けられたが、現在は埋められている。そこから西側に続く身廊部は、後陣よりも南北幅がある。後陣と身廊の間の内陣部分は、南側に方形の窓と小さな銃眼のような開口部が見られる。また最上部にはコンクリート製のメルロンが4つ並べ



30.4.12c Ermitage d'Alès

られている。これは内陣部北側には作られていない。そのかわり、北側では身廊の2階から扶壁の上を通って後陣の屋上に出るための鉄製の階段が作られている。その屋上には先に触れたように、ピラミッド型の台座の上に置かれた大きくて白いマリア像が立つ。1999年に修復されたもので、マリアは両手を広げ、頭には星が並ぶ金色の王冠を載せている。

内陣から続く身廊部は、その東半分が17世紀後半のジャン・サロモンの時代のもので、西半分は18世紀前半のエスプリ・ボワイエの時代のものである。身廊部は2階建てとなっており、1階部分は礼拝堂で2階はエルミタージュの居室部分となっている。18世紀の身廊の南側に開けられた礼拝堂の入口は半円頭形の質素なもので、その頭部のアーチは4つのクラヴォーから組まれている。この身廊南側には大小さまざまな開口部（窓や出入口など）が見られる。身廊北側は斜面に建てられており、特にその西半分の壁面は不整形のさまざまな石が乱積みされている。この壁にも窓や銃眼のような形の大小の開口部が見られる。

平面形の西ファサードは、山頂の西側のパノラマに面している。1階と2階に合わせて4つの四角い窓が開けられている。またまるで銃眼のように非常に細長い開口部も見られるが、これは礼拝堂の身廊西側に開けられた窓で、内部にはステンドグラスが据え付けられている。このファサードには上の方に時計が埋め込まれており、さらにその上には鐘が1つだけ吊された20世紀の鐘楼が作られている。鐘は19世紀には「マリー＝アレクサンドリーヌ」と名付けられた1100キロの大きなものであったが、1936年5月に現在の「マリー＝ジョナンヌ＝アレクサンドリーヌ」に換えられた。「マリー＝アレクサンドリーヌ」はアレスのコレクターに売られたという。

エルミタージュ礼拝堂の内部は、身廊部分が2階建てで、1階の礼拝堂は天井が低い。西半分は交差ヴォールト、東半分は半円筒形トンネル・ヴォールトである。西側部分の扉口の向かい側に、2階への登り口と、地下のクリプトに下りるための階段の入口がある（クリプトは洞窟のような空間で、祭壇が置かれているが、奥には小さな井戸がある）。身廊西端は平面形で、小さな祭壇が置かれている。先にも触れたように、壁にはステンドグラスが据え付けられた細長い窓が開けられている。この身廊は、現在は全体が白い漆喰が塗られてきれいに整備されている。

内陣および後陣は 2 階建てではないので天井は高く、内陣のそれはトンネル・ヴォールトとなっている。身廊の 2 階が、内陣と後陣を見下ろすトリビューンとなっている。この内陣は、南北両側において、半円アーチの下に奥行きの狭い空間（礼拝祭壇のスペース）が作られている。その壁面は自然の石が荒々しく積まれたもので、その中央をくり抜いて聖母マリア像が置かれている。北が「ノートル＝ダム・ドゥ・サレット」、南が「ノートル＝ダム・ドゥ・ルルド」である。さらにそれぞれのマリア像の下には祭壇が置かれている。これらの空間を「礼拝室」とするなら、内陣と見える部分はむしろトランセプトの交差点ということになるのかも知れない（実際、現地説明板にはそのように書かれている）。

ロマネスク期の後陣（あるいは内陣）は半円形で、中央には白くて大きな祭壇が置かれている。水平の白いコーニスの上には半ドームが架かる。このコーニスから下は石積みで線で描かれているのに対して、半ドームは古い石積みがそのまま見えるようになっている。後陣中央にはコーニスをさえぎる形で小円柱に挟まれたニッチがあり、聖母子像（Notre-Dame-des-Mines）が置かれている。また後陣の向かって右側の壁には、ロマネスク様式の見事な窓が開けられている。内部に向けて大きく隅切りされた半円頭形の窓で、採光の役割を果たしている。その窓の反対側（後陣の向かって左側）の壁には、1878 年に亡くなってこの礼拝堂に葬られたブルリー神父の墓碑パネルが据え付けられている。

Bibliographie :

CAG, 30/3, pp.122-129; Blanc-Bijon et Olmer (2009) pp.121-136; Médard (1992) p.9, p.70; Melmoth (2008) pp.36-39; Olmer et al. (2008) pp.47-49; RIP.

30.4.12d アレス／サン＝ジェルマン＝ドゥ＝モンテギュー小修道院

(Prieuré de Saint-Germain-de-Montaigu, Alès) 遺構

アレスからガルドン・ダレス川を渡って直線距離にして南東へ約 2.5 キロのところにあるモンテギューの山の山頂に、サン＝ジェルマン＝ドゥ＝モンテギュー小修道院とその教会の遺構が残っている。アレスの市街の西を流れるガルドン・ダレス川の対岸にあるロシュベル（Rochebelle）地区のおよそ 350 メートル南にあるロータリーから県道 D50 を西へ 150 メートル進み左折する。「プエッシュ・ドゥ・ファド」（Chemin du Puech des Fades）と名付けられた道を 650 メートルで右折して「サン＝ジェルマン通り」（Chemin Saint-Germain）に入り、細い道を 1.3 キロ登ったところである。北側のサン＝ジャン＝デュ＝パン（Saint-Jean-du-Pin）からアクセスすることも可能であるが（徒歩のみ）、途中から登り道の傾斜がきつくなり、その状態も非常に悪くなるので、このルートは避けるべきである。

もともとこの場所にはケルト人のオッピドゥムがあったとされるが、はっきりしたことは分かっていない。中世になると、10 世紀半ばからアレス領主のプレ家によって城が建設された。ただしこの時期のプレ家については不明なことが多く、城についても正確なところはよく分からない。このモンテギューの城は、その後は婚姻関係によってプレ家からアンデューズ家の所有に変わったらしい。

ここにプリウレが最初に創建されたのは、最も古くて 6 世紀、あるいはカロリング時代とも言われる。11 世紀にサンドラス修道院 [30.4.13] の修道士によってこの場所にプリウレが創建されたということは比較的是っきりしている。その聖堂はモンテギューの城に隣接する小さな城塞礼拝堂でもあった。それが捧げられたサン=ジェルマンは、オーセールの聖人ゲルマヌス (v.380-448) であるとされる。東西 9 メートルほどの小さな礼拝堂で、アレスやその近隣からの巡礼（とりわけ病気の子供たち）が、復活祭の期間にやって来たという。修道生活は、サンドラス修道院の分院であったのでベネディクト派の会則の下で行われた。

13 世紀になって、ニームのノートル=ダム大聖堂参事会の所有となり、その管理下に置かれた。これはアルビジョワ十字軍を終結させた 1229 年のパリ条約（モーの協約）で、それまでトゥールーズ伯に与していたアンデューズ家が、国王によってアレスの領地を接收されたことを受けたものであると考えられる。その際、アレスの共同領主プレ家のレーモン 2 世 (Raymond Pelet) の妻であったシビル (Sybille) が、ルイ 9 世に対してサン=ジェルマンの所有権を要求したが、王母ブランシュ・ドゥ・カスティージュがこれを拒否し、そこに女子修道院を作るためにモンテギューのプリウレをニームの大聖堂参事会に与えた。しかしその女子修道院の計画は実現はしなかったようである。ニームの大聖堂参事会員は聖アウグスティヌス (アウグスチノ) 会に所属していたため、モンテギューのプリウレも以後その会則に従うこととなる。

ニームの大聖堂参事会は、それまでの小さなサン=ジェルマン教会のすぐ北側に、新たにサント=マルグリット (Sainte-Marguerite) の名を冠するもっと大きな聖堂を建設した。またモンテギューのプリウレは、その分院としてサン=ジュリアン=デ=コース隠修修道院 (Ermitage Saint-Julien des Causses [30.4.12c]) とサン=ジャン=デュ=パン小修道院 (Prieuré Saint-Jean-du-Pin) を所有した。しかしこうした「発展」にもかかわらず、修道士の数は 10 名と少し程度で、修道院長はアレスには居住しなかった。

E. Goiffon によれば、宗教戦争の際には、最初カトリックである国王側によって破壊された（正確な年代は不明）。その後、1561 年 12 月、クロード・シュヴァリエ (Claude Chevalier) 率いるプロテスタント部隊によって荒らされた。聖具類は奪われ、所有していた書物や文書類が焼かれたという。数名いた修道士はこのプリウレを放棄してバガール (Bagard) に避難した。さらに 1563 年 5 月、プロテスタント側に立っていたアレス領主のフランソワ・カンビによって攻撃され、1570 年まで占拠された。こうした争乱の中ですでにかなり荒廃していたためか、18 世紀初めのカミザール戦争の影響はあまり受けなかったようである。1789 年の大革命の後、国有財産として売り払われた。

サン=ジェルマン=ドゥ=モンテギュー小修道院の遺構が残るのは、アレスの街を望むモンテギューの山の上のテラス状の場所で、標高は 360 メートルである。13 世紀の大きな聖



30.4.12d St-Germain-de-Montaigu

堂はラテン十字形をしており、身廊から後陣までの東西の長さはおよそ 26 メートル、身廊の南北幅は 12 メートル、トランセプトの南北の長さは約 20 メートルである（すべて外寸）。半円形の後陣の下半分の壁と、内陣に相当する交差部と身廊第 2 ベイ南側の壁、さらに交差部の北側のトランセプト（翼廊）の壁が残っている。南側のトランセプトは失われている。また西ファサードも現在は瓦礫の山と化しているが、もとはここにメインとなる扉口が開き、恐らくはその上に鐘楼が立っていたと思われる。



30.4.12d Crypte de St-Germain-de-Montaigu

交差部から身廊第 2 ベイ南側に続く壁は、廃墟となったこの聖堂の遺構の中でも最も当時の様子を今に伝えるものである。壁面は整形された長方形の中石材がきっちりと積まれている。その石積みの様子は、13 世紀なので最後期に当たるが、いかにもロマネスク的である。かつてベイを区切っていた横断アーチを受ける壁付き半円柱（方形の基壇と円形のトルスの上に立つ）が 2 メートル少しの高さまで残っている（身廊の反対側も同じ）。第 2 ベイ南壁の東端部、すなわち今述べた壁付き半円柱の向かってすぐ右側には、隣接する古い聖堂との間を行き来するために、クラヴォーがきれいに組まれた半円アーチの小さな通路が開けられている。この通路の中には、下へ下りるための狭い石段が作られている。つまり後陣と交差部（内陣）は上下二層構造になっているのである。

石段を下りるとそこは半円形の地下空間（クリプト）で、かつてはここに祭壇が置かれていたらしい。後陣東側の壁は下半分が整形された中石材がきっちりと積まれているが、上半分は不整形の小さな石と土で固められたものである。もともとはその部分もちゃんとした切石が組まれたものであったが、戦乱によって地上部分の後陣が破壊された後、応急的に天井を塞いだものではないかと思われる。この地下クリプトの中央東端には、下部が石段状に隔切りされた方形の窓が開けられている。また南側にも同じような開口部が見られるが、これは窓と言うよりも外部との行き来のために開けられた小さな出入口のようである。地下クリプトの西半分（交差部の下）には、南北両側に、かつてそこに架けられていた半円筒形のトンネル・ヴォールトの下半分が残されている。また西側の壁も、きれいな石積みがかなり上の方まで残っている。

13 世紀の大きな聖堂の南には、東西に長い通路を隔てて、11 世紀にサンドラス修道院の修道士によって建てられたとされる最初のサン＝ジェルマン教会の後陣の遺構がある。東西 12 メートル、南北 6 メートルの小さな聖堂で、長方形の単身廊の東側に半円形の後陣が続くというシンプルなプランである。残されているのは後陣の下半分であるが、比較的よく整形された方形の切石が丁寧に積まれている。少なくともその部分には開口部は見られない。扉口は身廊の北西の端にあった。この古い聖堂は、隣に大きなサント＝マルグリット教会が建てられた後は、プリウレの集会室（salle capitulaire）として使われたようである。この古い聖堂の東側（より

正確には南東側)にはクロワトルがあって、そこから 2 階の倉庫に登る階段 (15 世紀) が作られていた。またプリウレの厨房や修道士の居館などもあったが、現在これらはすべて消滅している。

サン=ジェルマン=ドゥ=モンテギュー小修道院遺構は現在の行政区分としてはアレスの市域にあるが、そのすぐ西側は、アレスに隣接するサン=ジャン=ドゥ=パン (Saint-Jean-du-Pin) のコミューンである。10 世紀にまでさかのぼると言われるかつてのモンテギューの城



30.4.12d St-Germain du 11^e siècle

(Château de Montaigu) は、その市域の境界線を隔てて、プリウレのすぐ西側 (つまりサン=ジャン=ドゥ=パンの市域の側) にあった。アレスからここに登ってくる道沿いにかつての城壁の遺構であると思われる石積みが残ってはいるが、城自体の建物などは消滅してしまっている。この城は、1230 年にアルビジョワ十字軍終結後、それを率いたシモン・ドゥ・モンフォールの息子であるアモーリーの部隊に占拠された。そして 1240 年になって、国王が設置したボーケールのセネシャル (Pierre d'Athiès) の命によって破壊された。

Bibliographie :

André (1995) pp.218-219; Anton et Gravi (1970) p.71-73; CAG, 30/3, p.129; Germer-Durand (1868) p.207; Goiffon (1881) pp.287-288; Clément (1993) pp.294-295; Moreau (1997) p.24.

WS : « Site officiel de la commune de Saint-Jean-du-Pin »

30.4.13 サンドラス／サン=マルタン修道院教会 (Abbatiale Saint-Martin, Cendras)

アレスから県道 D916 をガルドン・ダレス川に沿って北へ約 5 キロ進むとガレゾン川 (Le Galeizon) が西へ分岐するので、それを渡る。D916 をさらに 400 メートルほど進むと大きなロータリーがあり、それを左折して西へ向けて緩やかな登り道となっているアルチュール・ヴィーニュ通りを 150 メートル行くと、通りから 40 メートルほど入った南側の斜面にサンドラスのサン=マルタン修道院教会が建っている。すぐ隣はサンドラスの村役場である。

サンドラス修道院の創建は 10 世紀前半にさかのぼる。ベネディクト派の修道士たちによって古代のウィラの跡に建てられた。修道院の敷地内ではその遺構が発掘されており、3 世紀の墓碑も見つかっている。この修道院は、最初は 5 世紀のトロワ司教の聖ルプス (saint Loup de Troyes) に捧げられていたが、後に聖マルティヌス (saint Martin) の名を冠することになる。ニーム司教区に属し、創建以来、同司教の管理下に置かれていた。初代の修道院長はフロテール (Frotaire) で、ニーム大聖堂の 1020 年のカルチュレールが史料における初出である。12 世紀には 80 名もの修道士がいたと伝えられるほど勢力を誇った。1366 年、アヴィニヨンの教

皇ウルバヌス 5 世 (Urbain V) が、かつて自らもその修道院長であったマルセイユのサン＝ヴィクトール修道院の傘下に移管した。

百年戦争期の 14 世紀半ばに建物全体が要塞化された。1480 年には火災に遭っている。さらに 1702 年 12 月には、カヴァリエに率いられたカミザールたちの襲撃を受けて修道院が焼かれた。彼らは翌 1703 年にもサンドラスを襲ってこの修道院を攻撃・占拠している。それ以後、サンドラス修道院の衰退が始まった。大革命の後、国有財産として売却され、農家が

所有して聖堂は穀物倉庫などとして使用された。現在、聖堂の南側にあったクロワトル（修道院回廊）は失われている。その南側にあった修道院居館は壁面の一部が残るのみである。今は改修が施されて村役場が入っている。

サンドラスのサン＝マルタン修道院教会は、J. Anton と E. Gravié によれば、もともとは東西 40 メートル、南北 20 メートルの長方形で、身廊は今のものよりも東側に長く、したがって後陣もさらに東側に位置していたという。その古い東側部分が取り壊されて後陣が今の位置まで後退した時期と理由はよく分かっていない。現在残されたサン＝マルタン修道院教会の身廊は 12 世紀のもので、その当時は 4 つのベイから構成されていた。そのうち西側の 2 つのベイはカミザール戦争の際にカヴァリエによって破壊され、側壁の遺構が残るのみである。この身廊は、遺構部分も含めて、南北両側にそれぞれ 5 つの扶壁が一定間隔で並ぶ。南側の外壁には扶壁の間にロマネスク様式の窓（半円頭形で隅切りされたもの）が開けられている。東端から 2 番目の扶壁は他のものよりも大きくて、アーチ状の通路が東西方向に開けられている。この大きな扶壁アーチのすぐ東隣には、かつてあったクロワトルとの行き来のために使用された半円頭形の出入口があるが、現在は埋められている。身廊の壁面は南北共に比較的良好に整形された大きさの異なる中小石材が、水平方向に揃えて積まれている。

身廊の北側の外壁には扶壁は並ぶが窓などの開口部は見られない。西側の 2 つのベイは壁だけが残る遺構である。西端の第 1 ベイは壁面自体は失われているにもかかわらず、その内部に付けられていた半円頭形の壁アーチの上部のアーチ部分（つまり半円形に組まれたクラヴォーの列）だけが残されている。聖堂西端の旧西ファサードの遺構部分には、その中央にかつての扉口の痕跡が残されている。扉自体は 3 段の石段を登ったところに開いていた。その左右は厚さ 1.2 メートルの側柱で、おそらく扉の上は半円形のアーキヴォルトが架けられた立派なものであったと思われる。この古い西側の 2 つのベイの南側外壁には、その内側に倉庫のような建物が作られているが、そこは失われたかつての第 1 ベイと第 2 ベイにあった側廊に相当する部分である。

現在の西ファサードは、かつての身廊の第 3 ベイ（現在の身廊では第 1 ベイ）の西側に作られている。中央には現在の扉口（半円頭形でシンプルなもの）が開けられ、その真上には半円



30.4.13 Cendras



30.4.13 Cendras, abside

頭形の窓がある。この扉口と窓を結ぶ線が身廊部の中央の軸線で、そのすぐ北側（向かって左側）にずれたところに、鐘を 1 つ吊すだけのベイが開けられた鐘楼が作られている。扉口の向かって左側には壁付き半円柱が部分的に残されているが、これは身廊と側廊を分けるピアのものであったと思われる。簡素な図形的彫刻の施された柱頭が残されている。この西ファサードの向かって左側上部（側廊の上部に位置する）には小さな半円頭形の窓が開けられている。その窓の真下にあたる地面

には、中央に丸い穴が開けられた大きくて分厚い円形石板が残されている。サンドラスの修道士たちがオリーブやブドウをプレスするために使用したものであろうか。

高さのある現在の後陣（および内陣）は、P.A. Clément によれば 16 世紀に再建されたものである。その平面プランは半円形で、壁面はさまざまな大きさの中小石材が比較的ラフに積まれている。中央ではなく北東と南東側の高い位置に、隅切りされた半円頭形の窓が 2 つ開けられている。それらはともに修復されたものである。後陣の南北両側には扶壁が付けられている。後陣の南側には聖具室が増築されている。後陣の南北両側が身廊と接する部分、つまり身廊東端の外壁部分には半円アーチの痕跡が見て取れるが、これは側廊の断面に一致し、恐らくは今よりも南北の側廊が東側に向けて長かったことを示すものであると思われる。

聖堂内部は主身廊の両側に側廊が並ぶ 3 廊式である。主身廊は 2 つのベイから構成され、その東側に東西幅の短い内陣と半円形の後陣が続く。側廊に対して高さのある主身廊には半円筒形トンネル・ヴォールトが架かる。主身廊の側壁には小さな方形の穴が数多く開けられているが、ヴォールトが架かる起拱ラインにはそれよりも大きな方形の穴が、横一列に並んでいるのが見える。身廊のベイを区切るのは半円形の横断アーチで、方形のピラストルがそれを受けている。側廊との間には二重になった半円アーチが南北 2 つずつ並ぶ。そのうち内陣に近い第 2 ベイのアーチを受ける東側のピアは半円柱となっている。側廊の天井は身廊よりも低く、これもやはり半円筒形トンネル・ヴォールトである。ベイを区切るのは半円形の横断アーチで、方形のピラストルがそれを受け止めている。側廊の南北側壁には各ベイに半円形の壁アーチが付けられている。

凱旋アーチは上下の幅が小さめで、下に向けて開いた三日月のようである。中央には開口部が見られるが、外側が埋められているので、採光の役割は果たしていない。凱旋アーチの東側は東西幅の短い内陣のベイで、南北それぞれに隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。内陣のさらに東側は後陣となる。この後陣は、外側は半円形であるが、内部は五角形となっている。半円頭形の窓が 2 つ開けられている。水平のコーニスの上には半ドームが架けられている。後陣の南側には聖具室に通じる出入口が作られている。身廊から後陣まで、聖堂内部には彫刻装飾の類いは見られない。

聖堂の南側にあったクロワトルは消滅しているが、そのかつてのクロワトルの西寄りの所に、地下に下りる階段の入口がある。その階段はおよそ 20 メートルあって、そこからさらに数十メートルもの狭い洞窟（鍾乳洞）のような地下道が続いている。伝説によるとこの地下道はガレゾン川の下をくぐって、対岸のル・ピュエッシュ（Le Puech）の丘まで続いていたという。その丘には、古くはカエサルによって建てられた監視塔があったとも言われるが、13 世紀頃にこの地の領主ピュエッシュ家が城（Castel des Barons）を建設した。現在はその城のうち、13 世紀に建てられた方形の塔が残るのみである。1576 年、城は婚姻関係によって、モンクラールとサランドランクの領主（baron）であるラ・ファール（La Fare）家のものとなる。しかしこの城はリシュリユーの命によって破壊された。1630 年頃、ラ・ファール家は、ピュエッシュの丘の西およそ 1 キロ（今の県道 D32 沿い北側）に位置するサン＝マルタン＝デル＝ピュエッシュ城に移った。この城はガレゾン川対岸のサンドラス修道院とは対立関係にあったという。17-18 世紀においてラ・ファール家の居館であり続け、その名もラ・ファール城と呼ばれるようになった。ほぼ正方形の平面プランを持った 3 階建ての居館と、その南東側に付けられた大きな方形の塔が印象的である。19 世紀以降次々と所有者が変わり、20 世紀には一時的に放棄されていたようであるが、2024 年現在、高級シャトーホテルとなっている。

サンドラスから西へおよそ 2.5 キロのマラタベルヌの集落の古い墓地の敷地の中に、小さなサン＝タンドレ礼拝堂（Chapelle Saint-André de Malataverne）がある。壁面は不整形の小さな石が乱積みされたもので、身廊部分には高さの低い小さな扶壁が南北それぞれに 3 つずつ付けられている。身廊側壁には半円頭形の窓が 1 つだけ開けられている。後陣は半円形である。西ファサードには小さな屋根の付いた半円頭形の扉口と、その上にこれもまた小さな丸窓が開く。その上には本体の建物に比べて不釣り合いなほど大きな鐘楼が立ち上がる。この礼拝堂は、一見して古そうにも見えるが、正確な建設年代はよく分からない。16-17 世紀頃ということもあり得る。

Bibliographie :

Anton (2012) pp.4-6; Anton et Gravi (1970) pp.17-46; Beaunier (1911) p.141; *CAG*, 30/3, pp.314-315; Clément (1993) pp.109-110; Germer-Durand (1868) p.53; Goiffon (1881) pp.86-87; Goiffon (1916) pp.145-157; Maurette, et al. (1860) pp.577-579; Moreau (1997) pp.68-69; GV; RIP.

30.4.14 レ・サル＝デュ＝ガルドン／ラ・トゥールのサン＝ピエール礼拝堂

(Chapelle Saint-Pierre de La Tour, Les Salles-du-Gardon)

ラ・トゥールのサン＝ピエール礼拝堂は、レ・サル＝デュ＝ガルドンのコミュン域の南端近くに位置する。サンドラスからは県道 D916 で北へ約 2.5 キロ、アレスからは同じく D916 で北へ約 8.5 キロである。ガルドン・ダレス川右岸（西岸）の同名のラ・トゥールの城（14-15 世紀）がある集落から北へ向けてプルケラルグ（Pourcayrargues）の集落に通じる細い道を 150 メートルほど登ったところ建っている。



30.4.14 Saint-Pierre de La Tour

大革命まではノートル＝ダム＝ドゥ＝ラヴァール（Notre-Dame-de-Laval）の教区に属し（ラヴァールは、現在はレ・サル＝デュ＝ガルドンのすぐ東側に隣接するコミューンであるラヴァール＝プラデル Laval-Pradel）、ユゼス司教区内にあって同司教の管轄のもとに置かれていた。直接的にはここにあった小さなプリウレとともに、サンドラス修道院の所有する聖堂であった。

礼拝堂は、ゆるやかな斜面に堆積する岩盤の層の上に建っている。宗教戦争などによってもほとんど被害を受けなかったその姿（特に後陣側から見た姿）は、小さくてシンプルであるが、

ロマネスク聖堂の素朴で端正な美しさを見事に今に伝えるものとなっている。心が洗われるようなとはこのことを言うのかも知れない。建設されたのは 11 世紀後半頃とされる。

聖堂の外寸は、後陣を合わせて東西が約 13 メートル、南北幅は 7 メートル弱である。内外に扶壁や横断アーチはなく、長方形の単一身廊で、東側に東西 3 メートルの半円形後陣が付く。身廊と後陣の外壁は、完璧というわけではないが比較的整形が施されたさまざまな中小石材が水平方向に揃えて積まれている。おおよそ上半分が中石材、下半分が小石材、そして一番下の基壇部分が中石材からなっている。石積みの違いは建設時期の違いを示すものであるかも知れないが、いずれにしてもロマネスク期のものであることには変わりはない。基壇部分は傾斜した岩盤の上に建てられているので、特に身廊から後陣にかけては水平とはなっていない。身廊、後陣ともにその壁面には足場を組むための小さな穴がいくつも開けられている。身廊の壁面は南北ともに窓などはまったく開けられていない。

西ファサード中央には、石段を 2 段登ったところに扉口が開く。扉の上には二重の半円アーチが架かるが、彫刻装飾の類いは見られない。扉口の真上には、まるで銃眼のような縦に細長い半円頭形の開口部がある。切妻の頂には頭部が三角形となった小さな鐘楼が立っている。

半円形の後陣には、中央に半円頭形で縦に細長い窓が開けられている（隅切りはされていない）。この窓は、正確には中央（東）から少し南側にずれたところに位置している。この聖堂が建てられている地形的な理由によるのであろうか。この後陣には南側に、さらに大きな半円頭形の窓が開けられている。これは近代になってから新たに開けられたものである。窓枠の石組みも新しい。この後陣には南北ともに、身廊部と接する部分に扶壁のような出張りが付けられている。これは聖堂内部において、極めて東西幅の狭い内陣の存在を示すものであるとも言える。後陣の屋根との境である最上部にはコーニスが巡らされている。

聖堂内部はベイが 1 つだけの長方形の単身廊で、その天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトである。横断アーチはない。狭い内陣のようなスペースを介して東側に半円形の後陣が続く。後陣の上には半ドームが架けられている。聖堂外部と同じく、内部にも彫刻装飾の類いは見出せない。

ラ・トゥールのサン＝ピエール礼拝堂は、1963 年に歴史的建造物 (Monument historique) に指定された。現在ではミサなどの祭式は行われていないが、時おり地元の演奏家による音楽コンサートなどが開催されているようである。なお、サン＝ピエール礼拝堂のすぐ北には 12 世紀から 13 世紀頃の封建時代の方形の塔 (Tour Saint-Pierre) が建っている。現在残されている塔の高さは 8.5 メートルであるが、もとは 10 メートルあった。百年戦争の時には傭兵部隊の接近を監視する役割を果たしたという。

Bibliographie :

Clément (1993) pp.114-115; Germer-Durand (1868) p.232; Goiffon (1881) pp.355-356; Goiffon (1916) pp.369-372; Moreau (1997) pp.113-115; RIP.

30.4.15 ブラヌー＝レ＝タヤード／ブランナーヴのサン＝ピエール教会

(Église Saint-Pierre de Blannaves, Branoux-Les-Taillades)

ブラヌー＝レ＝タヤードのコミューン (1956 年にブラヌーとタヤードが合併) は、ガール県北部においてロゼール県との県境に位置する。古くからラングドックのアレスとジェヴォーダンのマンド方面を結ぶ街道沿いの中継地としての役割を果たしていた。ブランナーヴのサン＝ピエール教会は、そのブラヌー＝レ＝タヤードの北寄りのセヴェンヌの山中にある。アレスからは国道 N106 を北へおよそ 23 キロである。ガルドン・ダレス川にダムが作られていて、そのすぐ手前で県道 D357 に入り、南へ約 2.5 キロでブランナーヴの旧集落跡である。ここは山中にあって大きく開けた場所で、その西端からダートを歩いて 350 メートルほど東へ進むとサン＝ピエール教会に至る。

11 世紀にマルセイユのサン＝ヴィクトール修道院からやって来た修道士たちがここにプリウレを創建した。この場所は、サン＝ヴィクトールがジェヴォーダン (現在のロゼール県) に所有していた他の分院との行き来の際の中継地点として重要な役割を果たしたとされる。プリウレは最初は聖堂、修道士居館、農業用倉庫などからなっていた。司教区としては、ユゼス司教区に属した。その後モンペリエの大聖堂参事会の管理下に置かれた。P.A. Clément は、現在のサン＝ピエール教会の建物を 11 世紀終わり頃に再建されたものであるとする。それ以降もサン＝ピエール教会には長い歳月の経過の中で何度も修復の手が加えられているが、最初にその詳細が知れるのは 1679 年の修復工事で、その際には床石が修理され洗礼盤も新たに作られている。1703 年 2 月 2 日、カミザールの攻撃を受けて大きな被害を受けた。その時には鐘楼も破壊された。この聖堂でカトリックの祭りが復活したのは 1709 年のことで、1718 年には修復された鐘楼に新しい鐘が据え付けられたが、この鐘は大革命の際に失われている。聖堂自体も国有財産として売却された。それがコミューンの所有となったのは、19 世紀に入ってからである。20 世紀末の 1995 年に、地元の愛好会 (Les Association des Amis de Église Saint-Pierre de Blannaves) が設立され、ブラヌー＝レ＝タヤードのコミューンとともにサン＝ピエール教会の修復工事を進めた。

聖堂は、ブランナーヴの旧集落 (いくつかの建物が残る。施療院として使われたものもある)

の跡地の北側の斜面に、松や糸杉などの樹木に囲まれて建っている。ロマネスク聖堂がセヴェンヌの自然と溶け合ったその光景は絵のように美しい。身廊は2ベイからなり、その北側に16世紀になって増築された礼拝室が2つ並ぶ。身廊の南側には強力な扶壁が3つ付けられている。向かって左側のベイには、高さのある半円アーチが架けられた大きな鐘楼ポーチが立ち上がる。ここにはもともとは方形の鐘塔が建っていたと考えられる。そのアーチの下には地面から4段の石段を登ったところに方形の扉口が開く。扉口の上には、その扉の位置から少しだけ東側（向かって右側）にずれたところに、ロマネスク様式の窓が開けられている。外側に向けて隅切りされた半円頭形の細長い窓である。ポーチの上には、鐘が吊された半円頭形のベイが3つ横並びになった方形の鐘楼が作られている。この鐘楼は先にも触れたように1718年に再建されたものである。



30.4.15 Saint-Pierre de Blannaves

身廊南側の第2ベイ（鐘楼アーチの向かって右隣のベイ）には、近代になって開けられた方形で縦長の大きな窓がある。このベイの地面には大きな墓石が3つ並んでいる。墓地は、すでに打ち捨てられたものではあるが、聖堂の南側にも広がっている。その墓地を右手に見ながら聖堂の東側に回ると、半円形の非常にロマネスク的な後陣の姿を目にすることができる。それは斜面に組まれた基壇の上に、おおよそ方形に切られたさまざまな大きさの石材がラフに組まれて作られたものである。

後陣上部には、太いコーニスの下にいわゆるロンバルディア帯が巡らされている。南欧地域を中心として、11世紀の初期ロマネスク建築によく見られるものである。ここでは3つ付けられた出張りの少ないピラストル（台座と柱頭のない方形のピラストルでピラスト・ストリップとも言う。pilaster strip/lésène）の間に、壁付きの装飾的なニッチ（ブラインド）の半円形小アーチが3つ1組となって水平に連なる。後陣南側では小アーチは4つ1組で、その最南端の身廊部との境は扶壁のような方形の出張りとなっている。小アーチを受ける小さなモディヨンのいくつかには図形的な線刻が彫刻されている。後陣東端（中央）には、外部に向けて大きく隅切りされた半円頭形で縦に細長いロマネスク様式の窓が開けられている。隅切り頭部の半円アーチ部分は、やはり半円形のモールディングに縁取りされる形となっているのであるが、その半円形モールディング（および隅切りの頭のアーチ部分）と、そのすぐ上にあるロンバルディア帯の小アーチの位置が、わずかにずれている。後陣南側の壁面には、高い位置に縦長の方形の開き口が見られる。これはロマネスク期のものではない。後陣の上の凱旋アーチ壁には小さな丸窓が開けられている。2つの半円形モノリスが上下に組み合わせられたものである。

聖堂の西ファサードは、整形された方形の中石材が端正に積まれている。最上部の切妻部分の中央に縦に細長い小さな窓が開けられている。外部に向けては隅切りされていない。中央下

部にはかつて出入口が開けられていたわずかな痕跡が認められる。身廊の北側には礼拝室（16 世紀）が 2 つ並ぶ。それらに窓などは開けられておらず、それぞれが三角形の切妻屋根である。東側の礼拝室が身廊と接する屋根のところには、礼拝室の切妻屋根に合わせるようにして段々状に石が並べられているが、よく見ると階段ではなく、その用途についてはよく分からない。



30.4.15 Saint-Pierre de Blannaves

聖堂内部は、身廊が 2 ベイからなり、その天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトである。

身廊の南側の側壁には各ベイに半円形の壁アーチが付けられている。そのうち西側のベイには扉口が開く。扉自体は方形であるが、内部は扉の上に水平のリンテルが置かれ、その上に半円形のアーキヴォルトが架けられている。扉口のすぐ横には四角い聖水盤が据え付けられている。また扉口の上には内部に向けて大きく隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。側壁の東側のベイには内部に向けて隅切りされた大きな窓が開いている。この窓自体は縦長の方形であるが、隅切り外辺部の頭部は半円形となっている。身廊の北側には半円アーチを介して 2 つの礼拝室が並ぶ。それぞれ東側に石造りの祭壇が作られている。開口部はまったくない。天井はそれぞれ南北方向に架けられた半円筒形ヴォールトである。身廊内部の西壁の下部には、かつての半円頭形の出入口が残されている。ただし現在は埋められている。西壁の一番高いところには、ロマネスク様式の窓が開けられている。外側は隅切りされていないが、内部に向けては隅切りされている。

身廊の東側には、丸窓（内部に向けては隅切りあり）の開けられた二段構えの凱旋アーチがあり、その東側に半円形の後陣が続く。太いコーニスが水平に巡り、その上に半ドームが架かる。後陣中央には内部に向けて隅切りされたロマネスク様式の窓が開けられている。隅切りの頭部は、水平のコーニスの中央を中断する形になっている。隅切り内部の開口部は、半円頭形の縦長の窓である。また後陣の南側にも窓が開けられている。この窓は、外側には隅切りはなかったが、内部に向けては四角い形で隅切りされている。

ブランナーヴのサン＝ピエール教会の身廊内部には、いくつかのシンプルな彫刻装飾が見られる。身廊の南側の側壁には 3 つの方形のピラストルがあるが、そのうち西側の 2 つのピラストルでは、側壁の壁アーチを受け止める部分（インポスト）に付けられた水平のコーニスが、細いひねり紐が上下二本重ねられたものとなっている。また凱旋アーチを受け止める東側のピラストルのコーニスは、それよりも太いひねり紐が 1 本付けられている。その他、身廊部側壁の上の方に、旧約の『ヨハネ黙示録』に登場する 4 つの生き物のうちの 3 つである雄牛、ライオン、人間の頭の彫刻が組み込まれている。それぞれが、いわゆる四大福音書記者のシンボルであるルカ、マルコ、マタイを表す。なぜか 4 つ目の生き物であるワシ（ヨハネを表す）だけが見当たらない。長い歳月の中で失われてしまったのであろう。

Bibliographie :

Buholzer (1962) pp.123-124; Clément (1993) pp.157-158; Germer-Durand (1868) p.27; Goiffon (1881) pp.53-54; RIP.

略記号と参考文献

各聖堂のビブリオグラフィーでは、和書、翻訳書、欧文献（ファーストネームは略）、GV と RIP、Web-site (WS) の順に記した。

CAF: *Congrès Archéologique de France*. Paris, Société Française d'Archéologie.

CAG: *Carte Archéologique de la Gaul*. Paris, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres.

GV : Guide de Visite.

RIP : Renseignements ou Informations sur Place.

森川甫 (1999) :『フランス・プロテスタント 苦難と栄光の歩みーユグノー戦争、ナント勅令、荒野の教会』西部中会文書委員会。

マイネッケ、フリードリヒ (2016) :『近代史における国家理性の理念 I (中公クラシックス)』岸田達也訳、中央公論新社。

André, René (1988) : *Saint-Hilaire-de-Brethmas aux portes d'Alès*, Nîmes, Éditions Lacour.

Anton, Christian (2012) : « L'abbaye de Cendras, entre mythe et réalité », in *Le Lien des Chercheurs Cévenols*, no.171, Génolhac, pp.4-6.

Anton, Jules, et Gravil, Elie (1970) : *Recherches autour de Cendras*, Imprimerie TYPOTYP, Nîmes.

Aubarbier, Jean-Luc (2007) : *La France des Templiers*, Bordeaux, Éditions Sud Ouest.

Bardon, Achille (1894) : *Histoire de la ville d'Alais de 1250 à 1340*, Nîmes, Lacour.

————— (1869) : *Histoire de la ville d'Alais de 1341 à 1461*, Nîmes, Imprimerie Clavel et Chastanier.

Baubérot, Jean (1987) : *Histoire du protestantisme*, Paris, Presses Universitaires de France.

Beaunier, Dom (1911) : *Abbayes et prieurés de l'ancienne France. vol. 4 : Alby, Narbonne et Toulouse*, Liguge et Paris.

Bessac, Jean-Claude (1996) : *La Pierre en Gaule Narbonnaise et les Carrières du Bois des Lens (Nîmes) : Histoire, Archéologie, Ethnographie et Techniques*, Journal of Roman Archaeology, Ann Arbor & Oxford.

Bessac, Jean-Claude, et al. (2007) : « Le sanctuaire des Crêtes de Mabousquet, (Montmirat, Gard) », in *Revue archéologique de Narbonnaise*, tome 40, pp.33-42.

Blanc-Bijon, Véronique, et Olmer, Fabienne (2009) : « Une nouvelle mosïque sur l'oppidum

- de l'Ermitage à Alès », in *11th International Colloquium on Ancient Mosaics*, AIEMA, Oct 2009, Bursa, Turquie. pp.121-136.
- Buholzer, Jean-François (1962) : « Notes sur quelques églises romanes du Gard », in *Annales du Midi*, tome 74, no.58, pp.121-137.
- Chabrol, Jean-Pierre et Vezon, Thierry (2017) : *Alès, Capitale de Cévennes*, Nîmes, Éditions Alcide.
- Clément, Pierre Albert (1993) : *Églises Romanes oubliées du Bas Languedoc*, Montpellier, Les Presses du Languedoc.
- Cottle, Basil (2002) : *All the Cathedrals of France*, London, Unicorn Press.
- Cottret, Bernard (2001) : *Histoire de la Réforme protestante : Luther, Calvin, Wesley, XVIe-XVIIIe siècle*, Paris, Perrin.
- Devic, Cl. et Vaissète, J (1879) : *Histoire générale de Languedoc*, tome 6, Toulouse, Éditions Edouard Privat.
- Durand, Jacques (1977) : « Les statues-menhirs : le discours des divinités muettes », in *Connaissance du pays d'oc*, no.24, mars/avril, 1977, pp.20-23.
- Germer-Durand, Eugène (1868) : *Dictionnaire topographique du département du Gard*, Paris.
- Goiffon, Etienne (1874) : *Notice historique sur la paroisse de Saint-Génès-en-Malgoirès*, Nîmes.
- (1881) : *Dictionnaire topographique, statistique et historique du diocèse de Nîmes*, Nîmes.
- (1916) : *Monographies paroissiales. Paroisses de l'archiprêtré d'Alais*, Nîmes.
- Gueidan, Marcel (1982) : *Domessargues, petit village du Gard entre la vigne et les yeuses*, Nîmes, Impression de l'auteur.
- Hubac, Jean (2010) : *La paix d'Alès, La fin du parti huguenot ? (27 juin 1629)*, Paris, Les Éditions de Paris.
- Malbos, Lina (1977) : « Étude sur la famille féodale d'Anduze et Sauve du milieu du Xe siècle au milieu du XIIIe siècle », in *Mémoires de l'Académie de Nîmes*, VIIe série, tome LX, pp.202-229.
- Martinaud, Claude (2023) : *L'aventure chrétienne, tome 5 : L'Europe à feu et à sang, Les affrontements religieux XVIe s-XVIIIe siècle*, Le Coudray-Macouard, Saint-Léger Éditions.
- Maurette, J.-M., et al. (1860) : *Recherches historiques sur la ville d'Alais*, ouvrage publié sous les auspices de la municipalité, Alais, impr. de J. Martin.
- Médard, Jean (1992) : *Alès au fil des ans et des hommes, Chronologie et lexique de l'histoire d'Alès des origines à 1900*, Alès, Amis du vieil Alais.
- Melmoth, Françoise (2008) : « L'oppidum de l'Ermitage à Alès (Gard) », in *L'Archéologue*,

no.98, pp.36-39.

Moreau, Marthe (1997) : *Les châteaux du Gard du moyen âge à la Révolution*, Montpellier, Les Presses du Languedoc.

Olmer, Fabienne, et al. (2008) : « L'oppidum de L'Ermitage à Alès : un emporion à la frontière de la Transalpine », in *Bulletin de l'Association française pour l'étude de l'âge du fer*, no.26, pp.47-49.

Pérouse de Montclos, Jean-Marie, dir. (1996) : *Languedoc-Roussillon, Le guide du patrimoine*, Paris, Hachette.

Pomarède, Hervé, et al. (1991) : « Montmirat-Mabousquet », in *Archeologie de la France- Informations* (AdlFI) , Open Edition, 2004, Ministère de la culture.
<http://journals.openedition.org/adlfi/12155> (2024.4.10 アクセス)

Provost, Michel, et al. (1999) : *Carte Archéologique de la Gaul, 30/3, Le Gard*, Paris, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres (CAG) .

Pugnière, François (2000) : « Une reconstruction lente et difficile: l'Église cathédrale d'Alès aux 17e et 18e siècles », in *CAF* (1999/Gard) , pp.87-99.

Roux, Paul-Jean, abbé (1953) : *La cathédrale Saint-Jean d'Alès*, Avignon, Aubanel Ainé Editeur.

Ville d'Alès (2016) : *Alès au temps des seigneurs, Guide d'exposition*, Archives municipales de la ville d'Alès.

Web-site

« Le Herisson de Domessargues / L'histoire du village de Domessargues »
<http://leherissondedomm.canalblog.com/archives/2006/06/06/22597482.html>
(2024.6.2 アクセス)

« Site de l'Inventaire général du patrimoine d'Occitanie »
<https://inventaire.patrimoines.laregion.fr/> (2024.6.10 アクセス)

« Site officiel de la commune de Boucoiran-et-Nozières »
<https://www.boucoiranetnozieres.fr/> (2024.6.15 アクセス)

« Site officiel de la commune de Brignon »
<https://www.brignon.fr/> (2024.6.5 アクセス)

« Site officiel de la commune de Moulézan »
<https://www.moulezan.fr/> (2024.6.1 アクセス)

« Site officiel de la commune de Saint-Jean-du-Pin »
<https://www.saintjeandupin.fr/> (2024.7.1 アクセス)

« Site officiel de la commune de Saint-Geniès-de-Malgoirès »
<https://www.saintgeniesdemalgoires.fr/> (2024.6.10 アクセス)